

なぜ人は歩くのか ―信仰と観光の狭間で―

第1章	はじめに	1
第1節	研究の背景と目的	1
第2節	先行研究	1
第3節	研究方法・対象	9
第2章	四国遍路とは	10
第1節	四国遍路の概要	10
第2節	四国遍路の歴史	13
第3章	歩き遍路と車遍路	15
第1節	調査概要	15
第2節	調査対象の基本属性	16
第3節	遍路に対する意識	30
第4節	現代の巡礼者の実態	35
第4章	“旅人の宿 道しるべ”における徒歩巡礼者の実態	36
第1節	調査概要	36
第2節	調査対象の基本属性	38
第3節	徒歩巡礼者の遍路に対する意識	42
第4節	徒歩巡礼者の宿泊する民宿の意義	47
第5章	聞き取り調査	49
第1節	調査対象	49
第2節	調査報告	50
第3節	分析	53
第6章	結論	57
参考文献		59
資料		

第1章 はじめに

第1節 研究の背景と目的

徳島県で生活をしていると、菅笠をかぶり白衣を着用し、杖をつきリュックサックを背負いながら歩いている人を見かけることがよくある。彼らのような遍路は、一人で歩いていてもつねに弘法大師が同行して歩いているという同行二人の考えのもと歩いて四国八十八ヶ所を巡っているとされている。実際そのような考えを持って歩いている巡礼者がどれほどいるのかはわからないが、筆者は徳島大学に入学し徳島県で生活をするようになってから、このような人々を幾度となく見かけてきた。彼らはなぜ歩いて廻るのだろうか。正直に言って、初めて歩き遍路をしている巡礼者をみかけたとき筆者は衝撃を受けた。テレビ等のメディアでは見たことがあったが、本当に歩いている人がいるのだということに驚いた。また、筆者は一度1番札所から7番札所まで1日かけて歩いたことがあるのだが、それはとても大変で翌日には全身筋肉痛になり歩けなくなるほどであった。徒歩で通し打ちをするということは、そのような体験を毎日繰り返すわけだが、筆者には到底毎日歩くことなど考えられず、車社会の現代であるからこそ車で短時間でまわった方が効率的で良いと筆者は考えていた。しかし車社会の現代に、あえて交通網の発達していない都会から離れた場所に存在する聖地を訪れたり、歩いて四国八十八ヶ所をまわるという人たちも少数ではあるが存在するのだ。ではなぜこのような聖地巡礼やパワースポット巡りなどが現代の日本で実践されるようになったのだろうか。

本研究では、聖地巡礼の1つとして四国八十八ヶ所を巡る巡礼者を事例とし、徳島県における徒歩巡礼者に焦点をあて、車社会の現代にあえて歩いて四国八十八ヶ所を廻る人びとがなぜ歩くのか検討する。筆者は近年増加傾向にある徒歩巡礼者の中には、信仰心を持った宗教的な意味合いで巡礼を行う者だけでなく、“バックパッカー”のような、自分探しや人との出会いなどの経験を目的として巡礼を行っている者も多いのではないかという仮説をたてた。そこで、「歩く」という移動手段をあえてとることによる旅の経験に注目し、彼らが車ではなくわざわざ歩いて巡礼を行う動機について検討することを通じて、現代社会におけるツーリズムのあり方について考察していくことが本研究の目的である。

第2節 先行研究

1) 遍路研究

近年、聖地巡礼やパワースポットなどの言葉をよく耳にする。本来、聖地とは洋の東西を問わず、至福の喜びと深い満足感を与えてくれる場所[山中 2012a:1]であり、聖地への旅は巡礼や参詣と呼ばれていたが、今日ではメディアなどに「作られた聖地[山中 2012a:1]」として、パワースポットも聖地として扱われるようになった。本研究で取り上げる四国遍路はそのような聖地巡礼のうちの1つである。

これまで四国遍路については数多くの研究が行われてきたが、遍路研究を行う1人として浅川泰宏が挙げられる。浅川(2008)の研究対象である四国遍路は、現代社会における「癒しの場」「自然や地元の人々との触れ合いの場」「自分を見つめ直す場」などと意味づけられ、歩き遍路の実践者が大きく増加するなど、社会的な注目が高まっている。浅川(2008)は、多数の遍路がやってくる徳島は遍路を迎える社会と位置づけられるとしており、このような状況を巡る遍路者に対して「巡られる」という言

葉で表現している。いわゆる「接待」などは、こうした経験が折り重なる課程で磨き上げられた、巡る者への対処の知識や技法であるといえ、これは巡られる地域性が生んだ生活様式、すなわち文化であり民俗なのだ[浅川 2008]。浅川(2008)が目指したのは、接待の徹底的な問い直しであり、文化人類学的な再解釈である。四国遍路の巡礼者歓迎習俗である接待は、これまで札所近辺や遍路沿線で行われる、人々の主体的で自覚的な動機、つまり自由意志に基づく行為とされてきたため、接待を行う人々の「心性」は、信心、善意、愛、同情、優しさなどの美的な意味づけで捉えられ、これが四国の文化的なローカリティや風土と理解されてきた[浅川 2008]。これに対して浅川(2008)が見いだしたのは、意識されない慣習的行動すなわち実践 (partique) としての接待だ。日常実践としての接待についていえば、遍路が接待を求めて、人々の日常世界にやってくるがために、彼らは接待をするわけであり、周りの人がそうするから、そうしてきたから接待をするのだ[前掲書]。また、日常実践としての接待は、札所近辺や遍路道沿線などの空間的に限定されるものではなく、遍路に巡られることで動的につくりだされる関係論的な場であるため、遍路との出会いがあるならば、そこは接待がなされる潜在的な場である[前掲書]。

接待はまた、接待をする人々と遍路とのコミュニケーションの場でもあり、そこで人々は遍路とはどのようなものかを知り、その知識が集合したものが巡られる人々の民俗知識だ[前掲書]。なかでも重要なのが信仰に裏打ちされた正統な巡礼者<オヘンロサン>と、多様な負の意味性を付与される境界的存在<ヘンド>との語り分けの民俗だが、巡られる人々の民俗においては、認識や解釈の局面では対象者のカテゴライズが行われるものの、実践の局面ではいずれにせよ接待が行われるため、日常実践としての接待で行われるカテゴライズは何らかの形で無意味化され、負の意味性を付与された対象者であっても完全には排除されない[前掲書]。

四国遍路世界において、弘法大師は遍路の理念型であり、同行二人の思想にあるように、遍路は弘法大師とともにある存在であり、時に弘法大師そのものと見立てられもすることがあり、遍路行とは弘法大師のかつての修行課程の追体験とされ、同時に弘法大師自身も衆生の救済を行いつつ、自らの聖性を磨くために現在も遍路修行を続けていると考えられている(弘法大師遍路信仰)[浅川 2008]。『道指南』にもあったように、弘法大師の遍路修行は、巡拝行為と托鉢行為の2つの内容からなっているため、四国遍路世界に現れる弘法大師は<オヘンロサン>的でもあれば<ヘンド>的でもあるという両義性をもつのである[前掲書]。このような弘法大師像が巡られる人々の民俗知識にあるとき、その語り分けは必然的に不安定になり、聖なる存在である弘法大師は、人々の認識や解釈力をそもそも超越した存在であるため、認識者は眼前の遍路を決定論的に解釈することができなくなる[前掲書]。ただし、実際の個別の語りでは、このような「弘法大師」が直接的に持ち出されそれによって説明されることはほとんどない[前掲書]。

日常実践としての接待は、四国遍路についての民俗知識によって発動する慣習的な儀礼行為であり、同時に接待は、その民俗知識の確認作業でもあるため、個々の実践が繰り返されるたびに、民俗知識が書き換えられる可能性は常にある[前掲書]。浅川(2008)は、そのような実践は、巡られる人々の集合的記憶に基づく集合的な儀礼的慣習と個々の実践者の内面性を接合するものであると述べている。また、浅川(2008)は、”巡礼のフィールドでは、病気や死といった「伝統的」とされる動機を隠し持っている巡礼者に会うことも稀ではない”と述べている。浅川(2008)が述べているように、病気や死を動機に四国遍路をする巡礼者は少なからず存在しており、そのような巡礼者を対象とした研究も数多く行われている。しかし、遍路研究はしばしば観光の観点からも取り上げられることがあるため、次に観光について述べていきたい。

2) 観光研究

アーリ(2014)は“観光とは余暇活動であり、制度化され組織化された労働という対象物を前提としたものであり、観光は労働と余暇が、どのようにして、“近代”社会の社会的観光のなかで分離され、制度化された分野として成り立ったのかをみせてくれるものだ”と述べている。観光から生じる諸現象は、人々がいろいろな所に移動し滞在することから発生するものであり、観光は必然的に空間的移動をとまなう旅である[アーリ 2014]。旅とは住まいや労働のある通常の場合以外の場所へと向かうことで、そこでの滞在期間は短期でかつ一時的という性質をもっており、比較的近いうちに、“家”へもどる、という心づもりがあるものだ[前掲書:6]。

では観光について歴史をおってみてみると、13,4世紀には巡礼が大流行し、これらの巡礼には多く宗教的な信仰心と教養と娯楽が混じり合っており、15世紀になると、もうヴェネツィアから聖地パレスチナへの定期的なツアー旅行があった[前掲書:9]。16世紀から18世紀にかけて、ヨーロッパのほとんどの地域と北アメリカや世界の多くの地域で大衆観光(マスツーリズム)というものが広範囲に広まったと言われており、近代以前の社会にもしっかりとしたかたちの旅行はあったが、それは選ばれた階層のきわめて限られたものであった[前掲書:9]。そのような中で、<グランド・ツアー>というものがはっきりと確立したのは17世紀の終わりであり、これはイギリスの貴族や紳士階級の子弟が行った旅行で、18世紀も終わりごろになると専門職に就く中産階級の子弟もこれを行なった[前掲書:9]。また17世紀から19世紀にかけて、百聞は一見にしかず式の旅にシフトしていき、ガイドブックの発達によって旅行体験の視覚化ということが生じた。近代社会での大衆観光の大きな特徴は、大衆が基本的に仕事と関係のない理由で、時期を問わずどこかへ出かけ、何かまなざしを向け、そこに滞在するということであった[前掲書:11]。しかしいまやイギリスでは「自由時間」の四割は旅行に使われ、旅行は社会的信用の指標とされており、旅行をしない人はステータスを失うと言われており、この重要性は今日の旅行数の規模の大きさにも見られる[前掲書:11]。

19世紀になると、英国の南北で行楽に差異が生じ、南では日帰り小旅行が人気となり鉄道会社やトーマス・クック社のような企業が主催する旅行への参加傾向が見られるようになり、北では、自主的組織が休暇行動の発展に大きな役割をはたし、行楽客が同じリゾート地の同じ宿に何度もくりかえし行くという型がここでまもなくできていった[前掲書:60-61]。そして19世紀後半には、庶民の“余暇”活動から出現した意識として、余暇的行事に一度は出かけてみるということが<英国らしき>という重要な意識の一つとなった[前掲書:63]。また、2度の世界大戦間にいろいろな進展があり、イギリスの観光のまなざしにも影響があった[前掲書:63]。その進展とは、第一に、自家用車の増加、第二に空の交通が相当進歩したこと、第三に自転車ツーリングクラブやユース hostel 協会などさまざまな新しい組織が作られたこと、第四に休暇専用施設が最盛期となったこと、第五に船による旅の魅力が増えてきたこと、そして第六に有給休暇運動が急激に活発になってきたことである[前掲書:63-64]。アーリ(2014)は観光のまなざしについて、“個々人の心理などではなく、社会的にかたちが決まり、習得された「モノの見方」であり、世界を整序し、形づくり、分類する行為であり、階級、性差、民族、年齢ごとに構成されており、どの時代であっても観光と反対側にあるものとの関係性から構成されているため、社会体験や社会意識の非・観光的様相との対称点に生まれる”と述べている。このような観光のまなざしは、景色のみならず労働やサービスなどにも向けられている。

そして、19世紀から20世紀にかけて国外へ旅行する人の数が急増したのだが、海外旅行に行く人が増加したからといって彼らの思考や感じ方に変化が与えられるわけではなく、視野が広くなったり他国民に対する理解が深まったわけではない[ブーアスティン 1991:91]。これは、旅行経験そのもの

が変質したということであり、つまり旅行の便宜が増大し、改善され、安価になるにつれて、多くの人が遠くへ旅行するようになったが、目的地へ行くまでの経験やそこでの滞在の経験、そして持ち帰ってくるものは、昔とはまったく異なり、経験は希薄化され、あらかじめ作りあげられたものになってしまったのだ[前掲書:91]。ブーアスティン(1991)は、“合成的な新奇な出来事がわれわれの経験には充満しているが、私はそれを「疑似イベント」と呼ぶことにし、疑似イベントは自然発生的でなく、誰かがそれを計画し、たくらみ、あるいは扇動したために起こるものだ”と述べた。しかしD・マッカネル(2012)は、ブーアスティンの疑似イベント論について、“「疑似イベント」の研究については、適正な専門的視点がいまだ欠落している”と述べており、“ブーアスティンは観光客自身が「疑似イベント」の<原因>であり、観光客が表層的で規格された経験を欲すると主張したが、その主張を支持する情報は一切なかった”と述べている。そしてD・マッカネル(2012)は“観光客はブーアスティンが望む真正性を望んでいる”とも述べた。「真正性」とは本物らしさを表す用語のことだが、橋本(1999)は、“「真正性」に関して言えば、誰にとつての「真正性」であるのかが重要な問題であり、たとえ目の前で執行されている儀礼が「真正」であっても、観光者はその「真正性」を求めてやってきたわけではなく、見せ物性を楽しむために来たのだ”とは述べる。

ここまで述べてきたように、観光や旅の形式は時代を経るにつれて変化をし、現代の旅では自家用車や公共交通機関、飛行機などが多く利用されるようになり、見せ物としての観光を楽しむことを目的とするようになった。しかし交通手段が発達した現代で、あえて徒歩で旅をする者も存在する。では彼らはなぜあえて徒歩で旅をするのだろうか。

筆者が徒歩で旅をすると聞いた時、1番に思いついたのは四国遍路であったが、その他にもルルドの傷病者巡礼やサンティアゴ巡礼など、やはり巡礼の旅を思い浮かべることが多い。近年、日本のみならずローマやルルド、さらに世界遺産に指定されたサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路など、カトリックの聖地への巡礼にツーリズム的要素が色濃く見られ、聖地を訪れる動機として、信仰だけではなく観光も楽しむ人々が増加しているといわれている[山中 2012b:4]。現代の旅の1つとしてスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラを目指すサンティアゴ巡礼が挙げられるが、サンティアゴ巡礼は巡礼路としてスペイン北部を中心にフランス、ポルトガルなど西欧諸国に広がっており、現代西欧で最も活発な巡礼のひとつであり、近年の聖地巡礼の復興例として頻繁に言及されている[岡本 2012]。しかし岡本(2012)は、現代のサンティアゴ巡礼者たちを見てみると、彼らは必ずしも「敬虔なカトリック信徒」ではなく、むしろほとんど教会へ行ったことのないような人々のほうが多数派になりつつあり、「自分自身を見つめ直したい」、「就職する前に大きな冒険がしてみたい」といった動機から巡礼を始める若者が非常に多くなっているのだと述べている。サンティアゴには、2004年の聖年には18万人近くも巡礼しており、聖年以外でも年間10万人を超える人々が巡礼をするために訪れているが、それだけ多くの訪問者がある今日、交通網が整備されているにもかかわらず、あえて動力を用いずに聖地を目指す人々が増大している[土井 2012]。徒歩や自転車、馬に乗るなどして任意の場所から数日から数週間かけてサンティアゴを目指す人々の多くは、目的地に到着した時に多かれ少なかれ「巡礼が終わってしまったこと」に対して落胆するため、バスや飛行機で目的地に直行する人々に比べると、信仰に篤くないといわれている[土井 2012]。彼らは信仰や聖地を訪れることよりも、その場所へ向かうまでの過程、道中に旅の意味を見いだしているのではないだろうかと筆者は考える。では彼らは旅の道中にどのような意味を見いだしているのだろうか。

橋本(1999)は、“「観光」では、しばしば「巡礼」と同じ経路をたどり霊地を訪れることがあり、歴史的連続性を強調する立場からは、「巡礼」が「観光」の起源の一つと考えられる”と述べているが、

“観光の領域を明確にするために、両者を類似の形態を持つが、まったく別のジャンルに属しているものと考え、「観光」は「巡礼」の隠喩ではありえても、両者はまったく違った文化的文脈に属する”とも述べている。白装束に身を包み、ゆかりの神仏や霊場で祝詞やお経を唱える「巡礼」と、仕事から離れて神仏や霊地を垣間見る「観光」とは別物であり、「観光」は「巡礼」の隠喩ではありえても、両者はまったく違った文化的文脈に属するのだ[橋本 1999:57]。さらに橋本(1999)は、“日常空間から離れた非日常性の中に存している聖地への参拝を「巡礼」と呼び、聖地・霊地への旅には数々のタブーが課せられるため、通常の旅(=観光)とは区別される”と述べている。しかしこれに対して浅川(2008)は、四国遍路の世界において「信仰」という語彙は「観光」的な行為・目的意識を極力排除することで析出される概念であり、その意味で、「信仰」と「観光」は正反対にある対立概念であると述べており、巡礼ツアーは客観的に外形を見ると「観光」に違いはないのだが、当の巡礼者は決して「観光」ではなく「信仰」を求めているのだと述べている。こうした議論は巡礼研究においてめずらしいものではなく、宗教とツーリズムを研究する研究者には、観察対象の観光資源化を現実としては十分に認めながらも、一方では対象の中に「聖性」や「宗教性」の残存を読み込む態度が見受けられ[門田 2013:23]、また門田(2013)は、“現代の巡礼ツーリストに宗教性・精神性への志向を認める立場として共通項を指摘できる”と述べている。

ジェイムズ・クリフォード(2002)は、「巡礼」について“旅人とツーリストのあいだの重大な近代的対立を転覆するための良い手段を備えている。しかしこの用語は、その「神聖」な意味が支配的になる傾向があり、どんな文化的バイアスの問題があるにしても、「旅」を内包するところまで「巡礼」を拡大するのは、その逆にくらべるとたいへん困難なため、結局の所、まったく中立的で、潔白な用語や概念といったものは存在しない。”と述べている。しかし、クリフォード(2002)のように巡礼が観光と同じ部類であるということ完全を否定することはできない。L.トマシは、2000年の聖年にローマで開かれた世界聖年大会に集まった250万人の若者を取り上げ、「これらの若者がツーリストなのか、カトリック信者なのか、好奇心から来た者なのか、行楽客なのか、巡礼者なのかを一言でいうのは難しい」と述べているが、こうした状況は現代の多くの聖地について当てはまる[Tomasi 2002:21]。また佐藤(2004)は、“四国などの霊場巡拝の目的として、最も多い4割ほどの人々が、「信仰」を挙げているものの、次いで「信仰心と行楽をかねて」が3割弱ほどになっており、日本宗教の文脈でも、信仰とツーリズムが矛盾なく同居していることがわかる”と述べている。

日本における観光もまた、「宗教化」あるいは「自分探し」的なものになっている。アーリ(2014)は、“観光は、なれ親しんだ場から遠くへ移動し、またなれ親しんだ場へと戻るものであり、巡礼者も観光者もやり方は異なるが、どちらも神聖なる社殿に「参詣」するものである”と述べており、宗教と観光は同一ではないが似ているものであると捉えられている。では宗教的な要素を含む観光はどのようなものがあるかという、例として御朱印ガールや聖地巡礼、パワースポットのブームなどが挙げられる。パワースポットは、メディアによって御利益や地域ごとに紹介され、スピリチュアルな消費者のニーズに合わせて既存の消費の流行と相互乗り入れする形でブームとなり、メディアを通じて流行となった[岡本・川崎 2012]。岡本・川崎(2012)は、“パワースポットは自らの個人的なニーズに合わせて好みにあったものが選択できることが一般化したことによってブームとなり、社会全体の流動化や多様化が宗教的に反映されたものとして理解することができる”と述べている。このように、現代の日本では宗教的なものが観光に取り入れられるようになってきているのだ。このような宗教的なものが取り入れられた観光を行う者は、ターナー(2006)の述べる“通過儀礼”の3段階のうちの境界状態(リミナリティ)にあると言える。このリミナリティの人間の属性は例外なくあいまいであり、彼ら

は平常ならば状態や地位を文化的空間に設定する分類の網の目から抜け出したりはみだしたりしているのだ[ターナー 2006:126]。観光者において「境界様態 (リミノイド)」の状況を考えてみると、そこには無礼講のふざけた「非・まじめ」な行為への許容があり、比較的縛られない「共同態 (コムニタス)」があり、それはつまり仲間の一体感であって、半・日常生活的行為というか、ある種のお定まりになった、非・日常生活がみられる[アーリ 2014:19]。

大野 (2007) は“現代日本社会において、「私は誰なのか」という問いを抱えて苦悩している人たちの存在が顕在化している”と述べている。現代における最も尊重されるべき社会的価値の一つが「個人の自律性」であるからこそ、個々人は自己のアイデンティティを常に確認しなければならず、社会で流通している「自分探し」という言葉は、自己のアイデンティティをめぐる人々が葛藤している事態をよく表している[大野 2007]。このような個性豊かなアイデンティティを若者たちに要請する独自の社会背景が日本には存在した。戦後、焦土と化した日本社会が西側諸国と台頭な経済力を身につけるまでには、時間はかからず、人文・社会科学の諸分野では、終戦後驚異的な経済成長を支えた要因の一つが、日本社会における支配的な価値観にあったと指摘されている[大野 2011:158]。日本社会における支配的な価値観というのは、勤勉、孝行、忍従というような日本人の武徳間や道徳観と、「成功という華麗な物語」と「零落の不安という脅迫固定観念」を内包する「フォークセオリーとしての社会ダーヴィニズム」が結合したところからうまれてきた「自己成長物語」のことであり、つまり自分らしさのサクセスストーリーのことだ[大野 2007:158]。戦後の経済や教育の大改革によって、若者の思考は大きく変化し、集団という枠組みをまず尊重しそのなかで「自己実現」を貫くのではなく、自らの人生観にしたがって「自分らしく生きる」ことを第一義とする生き方が社会的に「正しい」として定着していった[前掲書:159]。しかし2000年代に入ると、日本的価値観に縛られることなく自分らしさを求めてあえて不安定な位置に留まるというフリーターの生き方は、貧困層のシンボルとなってしまった。こうした不安定な時代を背景にして、フリーターの生き方を選択した者のなかで「外」へでかけることに楽しみを覚え、冒険的な経験が自分の人生には意味があると思った者がバックパッキングという実践を「発見」し、それに身を投じていったのだ[前掲書:159]。このようなアイデンティティをめぐる脅迫的状况において、「自分探し」のツールとして注目されたバックパッキングであり、アイデンティティが他者と差異化することでもたされるのならば、多様な差異=異文化を長期間にわたって濃密に味わう「放浪」という旅は、アイデンティティの構築実践そのものだといえる[大野 2007]。しかし現代社会におけるバックパッキングは、冒険にあふれた「自己成長」の経験としてロマンティックに眼差されるものの、内実においてはマス・ツーリズムと同様に商品化された旅へと変質していたが、そのような旅であってもバックパッカーたちはそこから十分に冒険的スリルを実感し、旅の達成感や充実感を得ている[大野 2007]。では、このようなバックパッカーについて、次に詳しく述べていきたい。

3) バックパッカー研究

近年、日常的に見聞きするようになった「自分探し」という言葉は、「私は今、何を欲しているのか」「私は今、どうするべきなのか」というような問いを常時突きつけられているゆえに、個々人の興味関心が自己の内面へと内旋していく様子のみごとに表現している[大野 2011]。すなわち、現代社会は、常にアイデンティティに自覚的であることを要求されている社会であるわけだが、強固で不変的なアイデンティティがあるわけではない[前掲書]。このような、確たるアイデンティティを欲し葛藤する状況において、人々はバックパッキングという観光実践を「発見」し、これに熱中していった[前掲書]。

また、オルタナティブツーリズムとよばれる新たなツーリズムの形が登場したのだが、これは「代替観光」「新たな観光」とも呼ばれ、マスツーリズム（大衆観光）に対置される新たなツーリズムのあり方、あるいはマスツーリズムのアンチテーゼとされている[門田 2013:302]。オルタナティブツーリズムには、対抗性・下位性と非設計性という特徴があると門田(2013)は述べる。オルタナティブツーリズムが対抗の直接的対象としているのは、言うまでもなくマスツーリズムであり、日本の若年層において対抗文化運動が交流し始めた1960年代当時、アメリカでもヒッピームーブメントを背景とした「ドリフター」たちのバックパッキングが登場し、日本でも同様に「金持ち旅行者」が行かない場所への個人旅行、マスツーリズムでは敬遠されるような「貧乏旅行」を率先して行う人々が現れる[門田 2013:302-303]。彼らは危険な場所や貧困の蔓延る場所、不便な場所や政治的困難を伴う場所など、あえて観光地としては不人気な場所を目指したり、決して自らは貧困に喘いでいるわけでもないにもかかわらずあえて安宿に泊まり、汚い服装を纏い、マイナーなものを求める実践（下位性）を通じてマスツーリズムとの差異を強調し、支配的文化への対抗性を打ち出そうとするのだ[門田 2013:303]。また、対抗性や下位性を強調するオルタナティブツーリズムでは、事前に綿密に計画された安全な旅程は望まれず、ここで言う非設計性とは、旅のあり方を事前に設計することなく、あえて無計画な旅を行うことを意味するため、バックパッカーはオルタナティブツーリズムの思想的意味を考える際に最も重要な指標であると門田(2013)は述べる。

では、バックパッカーとは実際どのような人たちのことを指すのだろうか。高（1998）によると、バックパッカーの出現には、グランドツアー・トランピング・ユースホステル・放浪者の4つの動機が挙げられるため、これらの動機を一つずつみていく。

まず1つ目のグランドツアーについては、先ほどの観光研究にて述べたのだが、旅行の商品化、つまり現代観光の出現によってグランドツアーの動機は、社会的な自己、アイデンティティを確立するための旅、モラトリアム（猶予期間）へと大きく変化していった。いつまでも既成の大人社会に同一化しないままアイデンティティを模索し、自己探求を求める手段として旅するものが顕著になってきたのだ。彼らは社会的自己、アイデンティティを見いだすため海外で長期の休日を取り、そこで「あれか、これか」型の生き方でなく「あれもこれも」型の生き方をし、自分の多様な可能性を常に自由に発揮できるような柔軟性をもった旅、生き方をした[高 1998]。また、ツーリストの分類ではないが、現代においては大学間の交換留学制度や海外留学、語学留学などをする者が増加し、そこでその文化に直接接触するために旅行することがしばしば見られる。彼らのその旅行は自ら旅程を組み、柔軟で独自性に富んだ旅行をする傾向があるため、そのような一面はバックパッカーと重なる[前掲書]。以上、グランドツアーから派生したバックパッカーの特徴を一言で表現するなら「自己開発型（self-developers）」ということができる[前掲書]。

次に2つ目の動機はトランピングだ。18世紀の産業革命や民主化運動は大量の労働者を産みだし、職探しや、修行をするために町から町へ放浪する労働者の存在が目立つようになり、彼らを「トランプ」と呼ぶ[前掲書]。このトランピングは、グランド・ツアーと同様、職探し、修行を行う旅である一方、庶民にとって子供から大人への通過儀礼の意味合いを含んでいた[前掲書]。このようなトランピング体系も二度にわたる世界大戦によって終焉を迎え、トランプたちは生き残りをはかるために、熟練労働者から未熟練労働者、単純労働者へと変容していき、その結果トランピング旅行者は社会の逸脱者、少年犯罪を引き起こしやすい者と見なされ始めた[前掲書]。しかし戦後になってワーキング・ホリデーという制度が発足し、今日バックパッカーはこのワーキング・ホリデーによって訪問地での単純作業を通じて、文化交流を深め、かつ現地でも重要な労働力と見なされている[前掲書]。トランピング

から派生したバックパッカーの特徴は、かつて失われつつあった、労働を通じて達成感を見いだそうとする「達成型 (achiever)」ということができる[前掲書]。

そして3つ目の動機はユース・ホステルだ。ユース・ホステルの動きというのは19世紀ヨーロッパでの産業発達によって生じる、都市生活下で生じる疲労、ストレスなどを癒す運動としてはじまり、特に若者にレジャー、未開地域に対する美しさの発見など旅を通じて健全な精神を育成しようとした[前掲書]。1909年にドイツの小学校教師がビレッジ・スクールを休暇期間中に簡易宿泊施設として使用する許可を得たことを始め、これを機に欲念、地元自治体に古城を世界最初の永続的ユース・ホステルとして設立することを申請し、これがドイツより発祥したユース・ホステル (YHA: Youth Hostel Association) の起源だ[前掲書]。それとともに1908年に発足したボーイ・スカウトや1910年発足のガール・ガイド協会なども発展して、健全な精神の育成、社会活動が国境を越えて行われている[前掲書]。このような特徴を有するバックパッカーは「社会活動型 (social/excitement seekers)」と表現することができる[前掲書]。

最後に4つ目の動機は放浪者だ。20世紀初頭には、個人の休暇体験の多様化、好奇心の高まりによって、旅の目的地が数カ所に渡るようになり、彼らの旅行は必然的に長期に渡り、支出額も増加し、観光ニーズも多様多岐に渡るようになった[前掲書]。Cohen(1972)はそのような現状を分析するのに観光客を分類し、そのうち「drifter(漂流者)」に分類されたものは旅の行程において全くの未開地に行くのでもなく、また住み慣れた社会生活空間に行くのでもなく、観光知的色彩を強く帯びた施設などを避け、完全に自分なりの旅を作るものであった。彼らはきわめて柔軟なスケジュールで旅先での新しい出会いや経験を求め、人びとと興隆し現地に溶け込み、交通手段もさまざまで、彼らは自分たちだけの環境的にふさわしい適所を作り上げていった[高 1998]。このような現代社会がもたらしたストレス、重圧からの逃避として旅をするバックパッカーはその特徴を「逃避型 (escaper/relaxer)」ということができる[前掲書]。

以上の4つのバックパッカーの派生要因・動機を礎にバックパッカーが登場したのだが、まずバックパッカーという語が用いられるようになったのはThe Backpacker Phenomenon 1の著者、ジェームズ・クック大学のPearce教授に始まるとされており、彼はその著書の中でバックパッカーを5つの点において定義付けしている[前掲書]。それらの定義付けは、①「低廉な宿泊施設を好む」こと、②「他の旅行者との出会いを強く求める」こと、③「独自で柔軟な旅行計画を立てる」こと、④「比較的長期に渡って旅をする」こと、⑤「積極的にアクティビティーに参加する」ことの5つだ。これらのバックパッカーの定義において中核を担うのは「低廉な宿泊施設を好む」と「独自で柔軟な旅行計画」であると考えられ、前者は統計上のキー・ポイントになっているほか、そこで宿泊することで長期に渡る旅が可能となり、後者はバックパッカーの基本的特徴を表すほか、1980年代に唱えられた「新しい観光 (new tourism)」という概念におけるメルクマールが「柔軟性」をともなっており、その時代を象徴するバックパッカーと相通ずるものがあるからだ[前掲書]。

バックパッカーはこれまでお金をかけずかなり柔軟な旅程の下、放浪しているツーリストと見なされていたが、彼らは人との出会いを求め、自分が体験してこなかった未知の世界を渡り歩くことで自己実現を満たしていき、新たな出会い・刺激を求め、人とは違う自分だけの価値観を創造しようとするツーリストだと言える[高 1998]。また、イスラエルのユニークな学際的研究者カイク・ノイ(2004)は、語りの分析から現代のバックパッキングは旅人同士のコミュニケーションで成立している相互依存的な旅であることを明らかにした。ノイ(2004)は、“現代のバックパッカーは、遭遇する出来事の偶然性や一回性に経験の真正性を求めるのではなく、自らの経験と実感に真正性の基点を置くのだ”

と述べ、さらに“自己にとっての真正性を実感することによってアイデンティティが刷新され、旅によって自己変革したという語りがコミュニケーションを通じて伝達・流布されることによって、自己変革を望むバックパッカー予備軍が旅に駆り立てられる”と述べている。つまり、ノイ(2004)はバックパッカーが再生産されるサイクルを「自己にとっての真正な経験」に基点を置きながら、「アイデンティティの刷新」と「コミュニケーション」をキーワードにして具体的に提示した[大野 2007:157]。徒歩で四国遍路を行っている巡礼者も“バックパッカー”と同じように新たな出会いや刺激を求めて人とは違う自分だけの価値観を創造しようとするツーリストの1人ではないかと筆者は考える。

筆者は本節で述べてきたことを踏まえ、近年増加傾向にある徒歩巡礼者の中には、信仰心を持った宗教的な意味合いで巡礼を行う者だけでなく、“バックパッカー”のような、自分探しや人との出会いなどの経験を目的として巡礼を行っている者も多いのではないかという仮説をたてた。

第3節 研究方法・対象

本研究では、聞き取り調査とアンケート調査によって徒歩巡礼者の巡礼の動機を明らかにしていく。調査の具体的な方法としては、徳島県内の札所を訪れる巡礼者および民宿“旅人の宿 道しるべ”に宿泊している巡礼者を調査対象とした。“旅人の宿 道しるべ”は、宿泊客の6割以上が四国遍路を行う巡礼者であり、筆者は巡礼者の中に“バックパッカー”のような、自分探しや人との出会いを求めて巡礼を行っている者も存在するのではないかと考えていたことから、“バックパッカー”が宿泊するであろう安宿(=民宿)である“旅人の宿 道しるべ”にてアンケート調査を実施した。また宿の主人が実際にお遍路の経験者であるため調査にとっても協力的であったことから、宿泊している巡礼者に聞き取り調査を行う調査対象地としても協力をして頂いた。聞き取り調査は、2015年の6月28日、7月20日、10月28日、11月3日、11月6日の計5日間、合計17名に実施した。具体的な調査場所としては、6月28日は1番札所から6番札所、7月20日は23番札所、10月28日は「旅人の宿 道しるべ」、11月3日は16番札所から17番札所、11月6日は14番札所から16番札所である。

アンケート調査は札所と民宿で実施をした。札所でのアンケート調査については、2015年8月28日～10月6日の約1ヶ月間にわたって6番札所安楽寺、17番札所井戸寺、23番札所薬王寺の3カ所で徒歩巡礼者に限らずすべての巡礼者を対象とし、早稲田大学道空間研究会の作成したアンケートを各札所に100部ずつ、合計300部のアンケートを配置した。調査対象地は、海・山・都市部のそれぞれにて一カ所ずつ抽出した。回収された調査票総数は、102票であった。そして、旅人の宿“道しるべ”にて2015年9月から11月にかけての約2ヶ月間にわたって、宿に宿泊をしている徒歩巡礼者を対象にアンケート調査を実施した。早稲田大学道空間研究会の作成したアンケートを基に項目を多少変更したものを作成したものを100部配置し、回収された調査票総数は32票であった。

本研究では、札所でのアンケート調査と民宿でのアンケート調査の結果を比較することで、徒歩巡礼者と徒歩以外での巡礼者の違いを明らかにしていく。また、そこで明らかになった徒歩巡礼者の実態をふまえ、聞き取り調査の結果と比較をすることで、仮説を検証し、彼らが車ではなくわざわざ歩いて巡礼を行う動機について検討することを通じて、現代社会におけるツーリズムのあり方について考察していく。

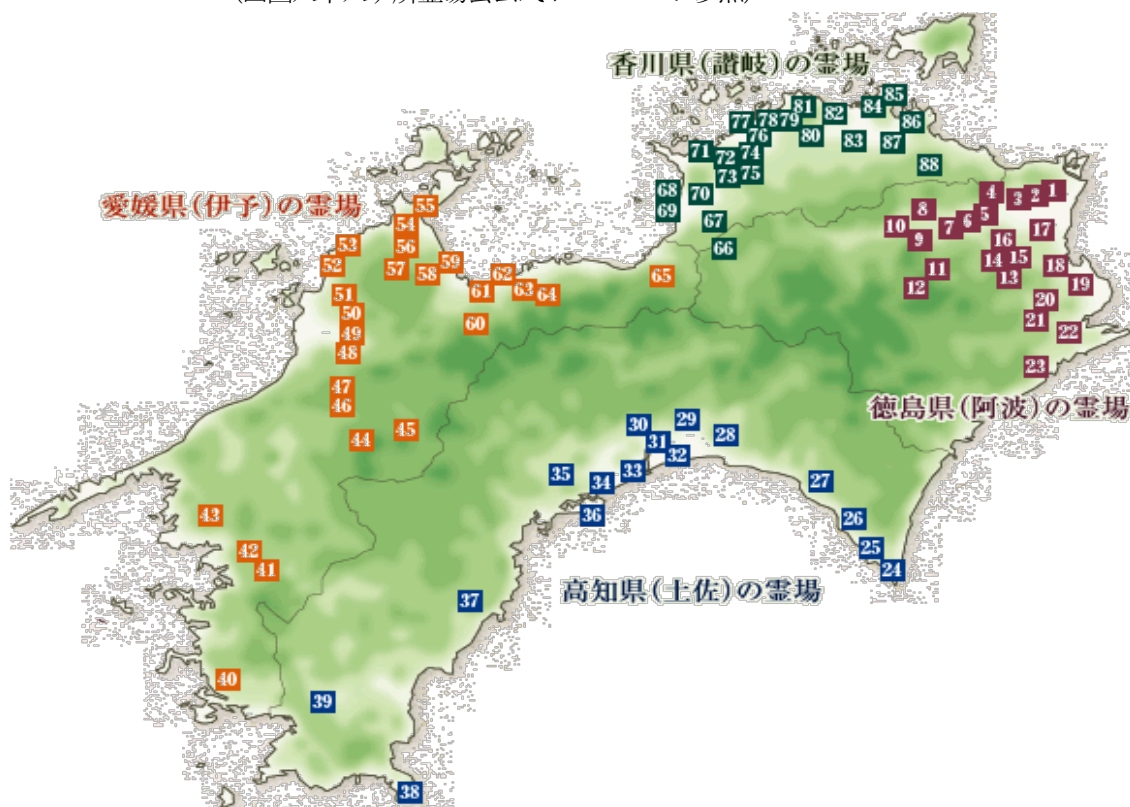
第2章 四国遍路とは

第1節 四国遍路の概要

四国遍路は、四国四県に散在している八十八カ所の寺院を巡る全長 1200 キロ以上にのぼる、長大な巡礼である[浅川,星野 2011]。古来、四国は国の中心地から遠く離れた非日常的な空間であり、さまざまな修行の場であった。日本には西国巡礼や坂東巡礼、秩父巡礼などが存在するが、これらは観音菩薩像を祀る寺院を巡拝するものであり、「本尊巡礼」と呼ばれているのに対して、四国遍路は弘法大師に有縁な寺院、聖地を巡拝するものであるため「聖蹟巡礼」もしくは「祖師巡礼」と呼ばれる[森 2005][佐藤 2004]。

下の図は、四国八十八ヶ所霊場の分布図である。札所には1番から88番まで番号がつけられており、1番札所は徳島県鳴門市にあり、高知、愛媛、香川と右回りに四国を周回し、最後の88番目の札所は香川県さぬき市にある大窪寺である[浅川 2008]。上の図をみてもわかる通り、八十八カ所の札所は等距離に位置しているのではなく、隣り合っているところもあれば、札所間が何十キロも離れているところもあるため、その道のりはとても簡単なものではない。八十八カ所の札所を徒歩で1周すると40～50日、車でも10日～2週間の日程を要すると言われている。

(四国八十八ヶ所霊場会公式ホームページ参照)

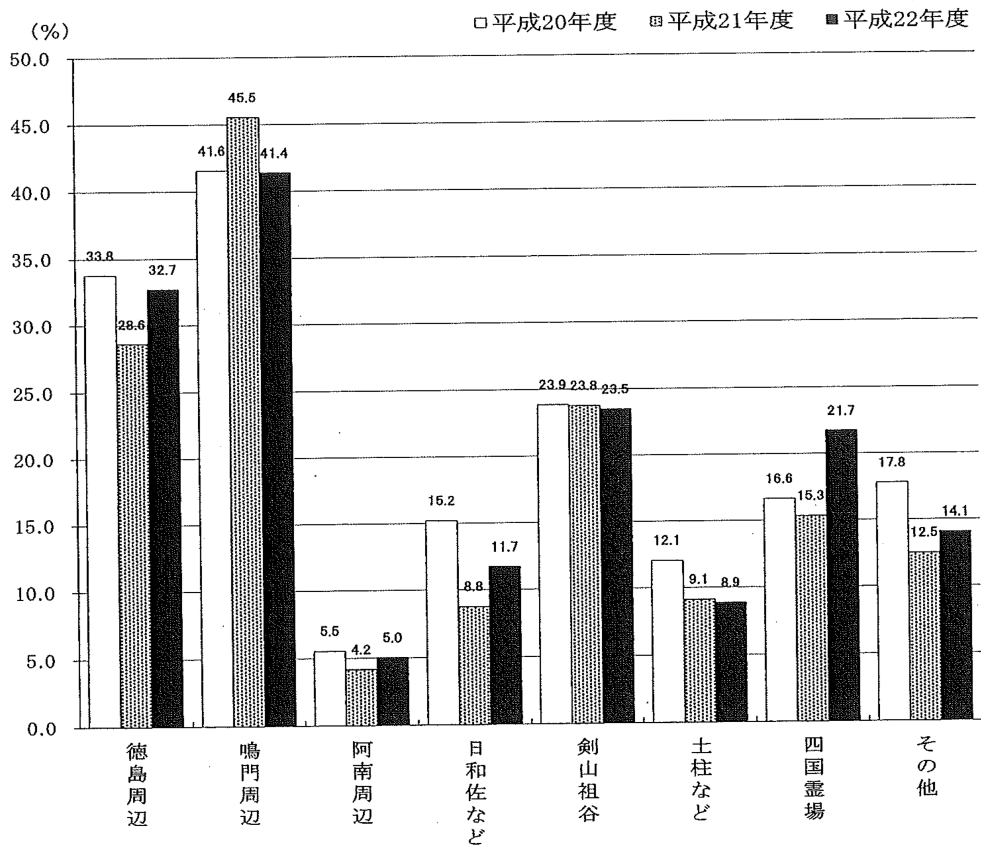


四国遍路は、イスラームのメッカ巡礼等とは違い、メインとなる1つの聖地、聖堂参詣をめざす巡

札ではなく、最低八十八のお堂とお寺を巡る巡礼である[浅川,星野 2011]。そのため、他の巡礼よりも個人の巡礼者の姿が目立ち、仏教の信者であると否とに限らず誰でもがどのような信仰を持っていようと遍路となることができるのが特徴だ。四国遍路の巡拝の方法はいくつも存在し、徒歩や車のみならず、交通機関を使うものや自転車・バイクを利用するものもある。また巡り方も、1度にすべて巡拝するものもあれば、何度かにわけて巡拝するもの、その日限りの単発的に巡拝するもの等が存在する。何度かにわけて巡拝する方法の代表例としては一国詣りと呼ばれるものがあり、これは阿波、土佐、伊予、讃岐と4回に分けて巡る方法である[星野・浅川 2011]。その他に、札所が密集している地域には、それらのまとまった札所だけを巡る七カ所参り、十カ所参りなどが伝統的にあり、徳島には阿波十カ所参り(1番から10番まで)、阿波五カ所参り(13番から17番まで)、阿波十七カ所参り(1番から17番まで)、高知では七カ所参り、愛媛には二つの十カ所参り(44番から53番までと、54番から64番まで)、讃岐では七カ所参り(71番から77番まで)などとなっている[浅川,星野 2011]。お遍路では札所を巡る順番に決まりはなく、お遍路で札所にお参りすることを「打つ」といい、四国を時計まわりに巡ることを「順打ち」、反時計まわりに巡ることを「逆打ち」という。一般的には「順打ち」が基本とされているが、「逆打ち」の方が功德が大きいとされている。その理由としては、弘法大師が順打ちで四国を巡っていることから、逆打ちのほうが大師に出会いやすいということ、遍路道が順打ちを基本として作られているため、逆打ちのほうが巡礼することが難しいとされているためだ。これらの「打つ」の語源は、昔はお寺を参拝した際に巡礼者が柱や壁に木製・銅製の納札を打ち付けていたことに由来している。

現在徳島県へ訪れる観光客のうち、2割以上の人が四国霊場を目的としている[徳島県観光政策課 2011]と言われており(図1参照)、四国遍路の数は年間約十万人と言われることが多いが、その詳細な数は定かではなく、年間約20万人と言われることもあれば、約1万人と言われることもある。またその中で、歩き遍路を行う者は約1%とされている。

歩いて四国遍路を行う際、遍路道というものが存在する。「道」は、非日常的で宗教的・呪術的意味の込められた異界に通じる特異な空間として観念されたところから形成されたと推測でき、古代の道はこのような霊威ある聖なる象徴的方向性をもっている空間のことを指していた[長田ら 2003]。今日、遍路道を歩くことに惹かれる老若男女が後を断たないが、その一端は、霊威ある異界へと通じる古代以来の道の記憶が彼らの心に深く遺伝子的に組み込まれているところにあるのかもしれない[長田ら 2003]。このような遍路道と呼ばれる四国八十八ヶ所の道中には、様々な道標が存在し、その道標通りに道を進んでいくと札所へとたどり着く。道中に存在する道標は様々なタイプのものであり、標識がたててあることもあれば、ガードレールや電柱に矢印が書いてあったりシールがはってあることもある。これらの道標の存在は、歩いて巡礼を行う際にとっても助かるのだが、「順打ち」の向きでの道標しか存在しないことが多いため、「逆打ち」をするにはまた整備が整っていないのが現状だ。



(図1 徳島県観光政策課 平成23年度観光動向調査より参照)



(2番札所から3番札所へ向かう道中)



(4番札所から5番札所へと向かう道中)



(5 番札所から 6 番札所へと向かう道中)



(外国人向けの英語の道標)

第2節 四国遍路の歴史

四国遍路の起源については明確でなく諸説ある。そのうちいくつかの例を挙げてみると、弘仁6年(815)、空海が42歳のときに空海自身が現霊場の一つ一つを修行しつつ歩きながら開創したというもの、空海入定後、高弟真済がその遺跡を遍歴したというもの、愛媛松山の豪族衛門三郎が自らの非を悟って遍路を行ったのに始まるというもの、嵯峨天皇の子で空海の弟子になった真如親王が始めたというものがある[浅川,星野 2011]。これらの中でも最も有力であると言われているのは、弘仁6年(815年)、空海が42歳の時に空海自身が現霊場の一つ一つを修行しつつ歩きながら開創したというものだが、史的信憑性は低く四国遍路の始まりは史実としては不明であるといえる[浅川,星野 2011]。また、四国遍路が弘法大師の巡礼であるとされることから、その起源は空海の時代、すなわち8世紀末から9世紀初頭とする言説もあるが、歴史的な根拠はない[浅川 2008]。聖地としての四国遍路の一部が分権的に現れてくるのは平安時代初期、8世紀末の空海24歳の時の書『三教指帰』であり、史料に四国遍路が触れられてくるのもともに平安末期の文献である『今昔物語』、『梁塵秘抄』である[浅川,星野 2011]。四国遍路が興隆を見せるのは江戸時代に入ってからであるが、江戸時代初期は、札所寺院の荒廃や、宿泊施設の不足、道路や交通網の劣悪などを理由に、庶民が遍路に出かけることは少なかったと佐藤(2004)は述べる。しかし18世紀中頃からは拵販による道路や橋、渡し舟などの整備が進み、さらに真念などによって始められた標石の設置や遍路宿が増えたことで、遍路は増加し始めた[佐藤 2004: 109-110]。そして四国遍路の年間総数を検討すると、江戸初期にはその数は少なかったが、中期以降には巡拝記の出版や遍路絵図が出まわることによって遍路は増加し、その後も時代によって変動はあるが、年間平均2万人前後の遍路があったと捉えられる[佐藤 2004:113]。

そして 1930 年頃になると、従来の巡礼のスタイルにこだわらず、様々な交通機関を用いてレジャーとして効率的に四国遍路を行う人々が現れ、彼らは「モダン遍路」と称された[森 2005:54]。第二次世界大戦が激化すると巡礼者の数は減少し、戦後しばらくは四国遍路の巡礼者は少なかったとされ、戦後再び四国遍路が多く行われるようになるのは 1950 年代半ばであると思われる[森 2002]。戦前は四国遍路を、ハイキングや娯楽として捉える思想も見られたが、四国遍路を語る時には多くの場合に暗鬱さや異常さがステレオタイプ化されており、戦後しばらくの四国遍路に対するステレオタイプも戦前とあまり変わらなかった[森 2002]。

公共の交通機関を利用した四国遍路は、第二次世界大戦前にも行われていたが、貸し切りバスによる四国遍路を行うツアーは、1953 年の伊予鉄観光社によるものが最初であり、その後 1956 年には瀬戸内バスでもバスツアーが開始された[森 2002]。バスツアーの登場に続き、昭和 30 年代以降の自家用車の普及にともない「マイカー遍路」が登場し、個人、家族づれといった、団体による巡拝とは違った巡拝のパターンが生まれ、1990 年代にはタクシーによる巡拝ツアーも開始された[森 2002]。また、1990 年代半ばから四国遍路は、「癒し」や「自分探し」などと結びつき、老若男女を問わず多くの人々を四国の旅へと導くようになった[森 2002]。

第3章 歩き遍路と車遍路

第1節 調査概要

本研究では、四国遍路の巡礼者がなぜ巡礼を行うのか、その背景にはどのような想いが隠されているのかを検討する上で、まずは巡礼者の状況把握を行うため、アンケート調査を実施した。このアンケートは早稲田大学道空間研究会（以下、早稲田）が作成したものであり、遍路道や移動・道中に関する問題、あるいはこれらの関連要因など、遍路道と直接または間接的に関連する現代遍路修行者の遍路意識と遍路関連基本行動の実態を把握することを目的として 1996 年に実施されたアンケート調査である。本章では、1996 年に早稲田が実施したアンケートを利用して再びアンケート調査を行い、20 年前のアンケート結果と比較をすることで、現在お遍路を行っている巡礼者の人物像や、遍路の動機、遍路に対する意識を明らかにしていく。

1) アンケート概要

まずはじめに、早稲田がアンケート調査を実施した際の調査の目的を述べる。早稲田は、アンケート調査を実施することで、実際に遍路に出かける人びとの意識と行動を把握することを目指してはいたが、現代遍路行為や遍路意識一般をそれ事態として把握することを目的としたものではなく、遍路体験において遍路道空間や道中体験が重要な役割を演じているという仮説に基づいて、遍路道・道中などの道空間と遍路修行者の意識や行動との関連を明らかにしようとした[長田ら 2003]。つまり、遍路道や移動・道中に関する問題、あるいはこれらの関連要因など、遍路道と直接または間接的に関連する現代遍路修行者の遍路意識と遍路関連基本行動の実態を把握することが中心となる[長田ら 2003]。そしてこの調査によって、移動手段は圧倒的に車遍路の優位にもかかわらず、その車遍路の心中はそれなりに複雑であることが判明した[長田 1997]。

2) 調査期間

本調査は、2015 年 8 月 28 日～10 月 6 日に実施し、調査期間は約 1 ヶ月となっている。

3) 回収票

本調査では、調査対象を徳島県にしぼり、徳島県の 3 札所を抽出して調査を実施し、各札所に 100 部ずつ、合計 300 部のアンケートを配置した。調査対象地は、海・山・都市部のそれぞれにて一カ所ずつ抽出した。回収された調査票総数は、102 票であった。回収されたアンケートの札所別内訳は以下のようなものである。（ ）内は各地点の回収率である。

6 番安楽寺	53 票 (53%)
17 番井戸寺	11 票 (11%)
23 番薬王寺	38 票 (38%)
計	102 票 (34%)

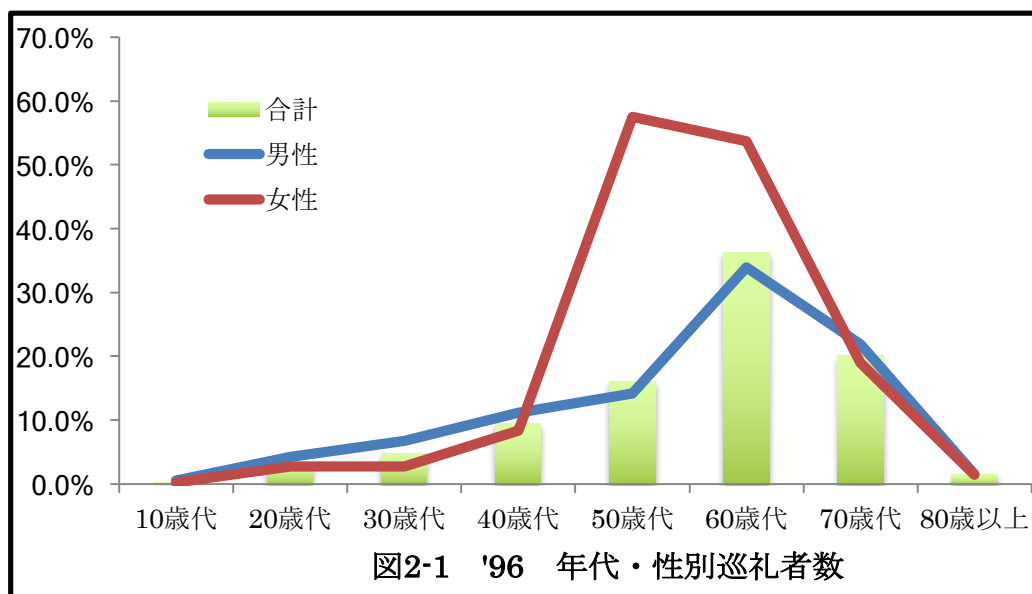
第2節 調査対象者の基本属性

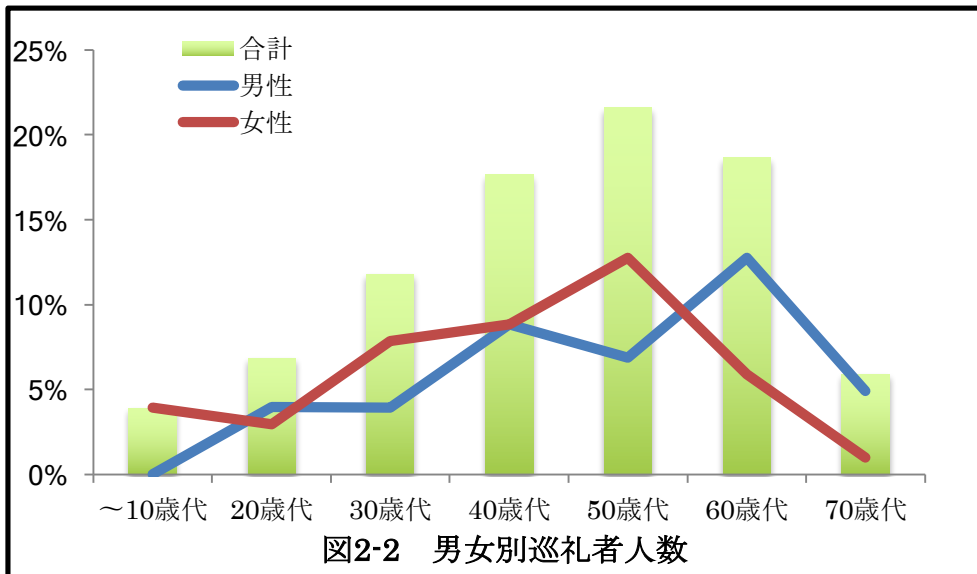
1)性別・年齢

まず始めに回答者の性別は、96年の調査では男性48.4%、女性50.2%とほぼ同数となっており、本調査での回答者の性別は男性が43.1%、女性が46.0%、無回答が9.1%であったため、男女の割合がほぼ同数であることに変化はみられなかった(図2-1)。また年齢は、96年の調査では13歳から89歳の幅広い年齢層で平均年齢が59.8歳となっていたが、本調査では8歳から79歳となり平均年齢が48.4歳と10歳ほど平均年齢が低下したことがみてとれる。年齢層でみると、96年の調査ではもっとも多い年齢層が60歳代の36.3%で、2番目が70歳代の20.2%、3番目が50歳代の16.2%、4番目が40歳代の9.6%と続いているが、本調査でもっとも多かった年齢層は50歳代の25.0%、2番目が60歳代の21.6%、3番目が40歳代の20.5%、4番目が30歳代の13.6%と続いており、若い年齢層の巡礼者の増加がみてとれる(図2-2)。

各年齢層ごとに男女比をみると、96年の調査では20歳代から40歳代までは男性の割合がやや多いのに対して、50歳代および60歳代になると逆に女性の方がやや多くなっているが、本調査では30歳代から50歳代までは女性の割合がやや多いのに対して、60歳代および70歳代になると逆に男性の方がやや多くなっている。この結果から、20年前は男性は比較的若いうちからお遍路に出かける人が多く、女性は50歳代ないし60歳代になって出かける人が多かったが、現在は男性は仕事が一段落した年齢、女性は子育てが一段落した年齢で遍路に出かける場合が多いことが見て取れる。

(注) 簡単なアンケートとはいえ、遍路の合間に短時間に書くには少々分量も多く寺が小さいなどの理由から、部分的な記入のみのもも多く性別や年齢などの基本的データが得られないものもあった。しかしながら、他の内容部分について回答していただいている場合には有効票として扱った。





2)現住地

次に回答者の現住地を見ていくと、96年の調査では地域別にみると近畿24.0%、四国20.2%、関東14.6%、中国13.6%、九州12.5%、中部8.4%、北海道1.7%の順となっている(図2-3)。それに対して本調査の回答者の現住地を地域別にみると、関東が25.5%、四国が23.4%、近畿が20.2%、中国が11.7%、中部が8.5%、九州が7.4%、海外が2.1%、東北が1.1%となっている。(図2-4)

さらに詳しく県別に多い順に見ると、96年の調査では、大阪府(12.4%)を筆頭に、福岡県(6.6%)、香川県(5.8%)、愛媛県(5.7%)、岡山県(5.7%)、徳島県(5.0%)、愛知県(4.7%)、東京都(4.4%)、山口県(4.2%)、高知県(3.7%)、京都府(3.6%)、兵庫県(3.4%)、千葉県(3.2%)、広島県(2.8%)、埼玉県(2.5%)、神奈川県(2.4%)と続いている(表2-1)。それに対して本調査では、東京都(9.6%)を筆頭に、徳島県(8.5%)、大阪府(7.4%)、兵庫県(7.4%)、香川県(7.4%)、岡山県(6.4%)、愛媛県(6.4%)、神奈川県(5.3%)、千葉県(5.3%)、愛知県(5.3%)、広島県(5.3%)、群馬県(3.2%)、大分県(3.2%)、岐阜県(2.1%)、京都府(2.1%)、三重県(2.1%)、福岡県(2.1%)と続いている(表2-2)。今回徳島県のみでアンケートを行ったところ、東京都の割合が一番高く、その次に徳島県、さらには四国近辺の大阪府、兵庫県、香川県、岡山県、愛媛県と続き、その後神奈川県、千葉県、愛知県、広島県ときていることがみてとれ、20年前の調査に比べ関東地方から訪れる巡礼者の割合が高くなったことがわかる。

3)家族構成(配偶者関係)

家族関係については、あまり詳しい質問は差し控え、配偶者関係に限定している。96年の調査では、全体の63.8%が「夫または妻がいる」と答えており、夫婦共に健在である人の割合がもっとも多く、次に「夫または妻と死別した」(18.4%)、「結婚していない」(9.6%)、「夫または妻が離別した」(3.5%)と続いている。それに対し本調査では全体の49.0%が「夫または妻がいる」と答えており、夫婦共に健在である人の割合がもっとも多いということに関しては20年前のものと同じだが、割合をみまると約15%も減少していることがわかり、次に「結婚していない」(29.4%)、「夫または妻と離別した」(6.9%)、「夫または妻と死別した」(1%)と続いていることから、独身男女の巡礼者の割合が増加したことが見て取れる。

男女別に見ると、96年の調査では男性の1位である「妻がいる」(76.5%)が女性の1位である「夫がいる」(52.8%)をかなり上回っているのに対し、次の「夫または妻と死別した」と答えた人については、女性の場合「夫と死別」が2位で27.9%、男性の「妻と死別」は3位で(8.5%)である(表2-3)。男性では2位に「結婚していない」10.2%があがっており、これは女性の場合(9.2%)とあまり変わらないが、女性の場合2位の「死別」にはるか及ばない。それに対し本調査では、男性は「妻がいる」が1位で63.6%であり、女性の1位の「夫がいる」の44.7%をかなり上回っているが、次の「結婚していない」については、女性が38.3%で男性が25.0%と女性が男性をかなり上回っている。(表2-4)

年齢別に見ると、本調査でも20年前と同じことが言え、10歳代から30歳代では「未婚」の割合が最も多いのに対して、40歳代から70歳代までは「有配偶」が1位となっている。また、96年の調査では有配偶者は50歳代までは増えていくが60歳代以降は減少していくのに対し、「死別」が60歳代以降急が増えてきていたが(表2-5)、本調査では60歳代、70歳代は80%以上が「有配偶」なのに対し、30歳代は30.4%、40歳代は64.7%となっており、また30歳代、40歳代共に2位が「未婚」となっていることから、中年の未婚男女の巡礼者の割合が高くなっていることがわかる(表2-6)。

表2-2 都道府県・地方別巡礼者数

県	度数	割合	地方	度数	割合
山形	1	1.1%	東北	1	1.1%
東京	9	9.6%	関東	24	25.5%
神奈川	5	5.3%	中部	8	8.5%
千葉	5	5.3%	近畿	19	20.2%
茨城	1	1.1%	中国	11	11.7%
群馬	3	3.2%	四国	22	23.4%
埼玉	1	1.1%	九州	7	7.4%
岐阜	2	2.1%	海外	2	2.1%
長野	1	1.1%	合計	94	100.0%
愛知	5	5.3%			
大阪	7	7.4%			
兵庫	7	7.4%			
京都	2	2.1%			
三重	2	2.1%			
和歌山	1	1.1%			
岡山	6	6.4%			
広島	5	5.3%			
徳島	8	8.5%			
香川	7	7.4%			
愛媛	6	6.4%			
高知	1	1.1%			
福岡	2	2.1%			
熊本	1	1.1%			
佐賀	1	1.1%			
大分	3	3.2%			
アメリカ	2	2.1%			
合計	94	100			

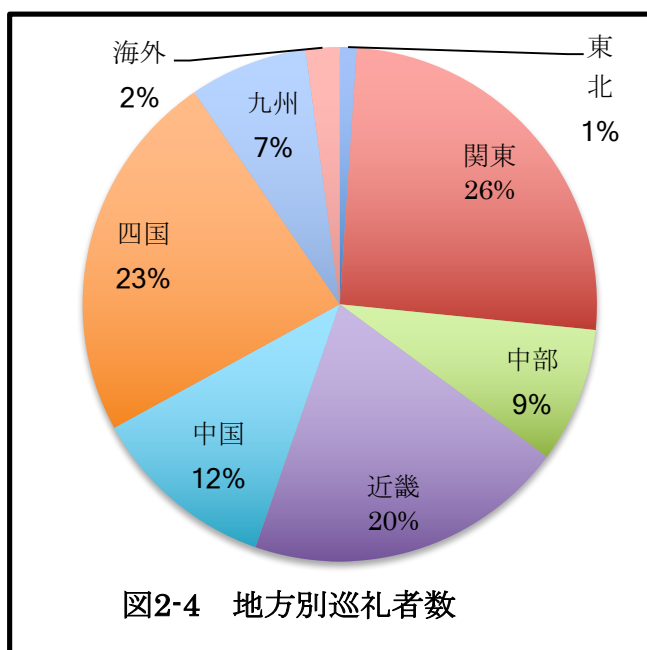
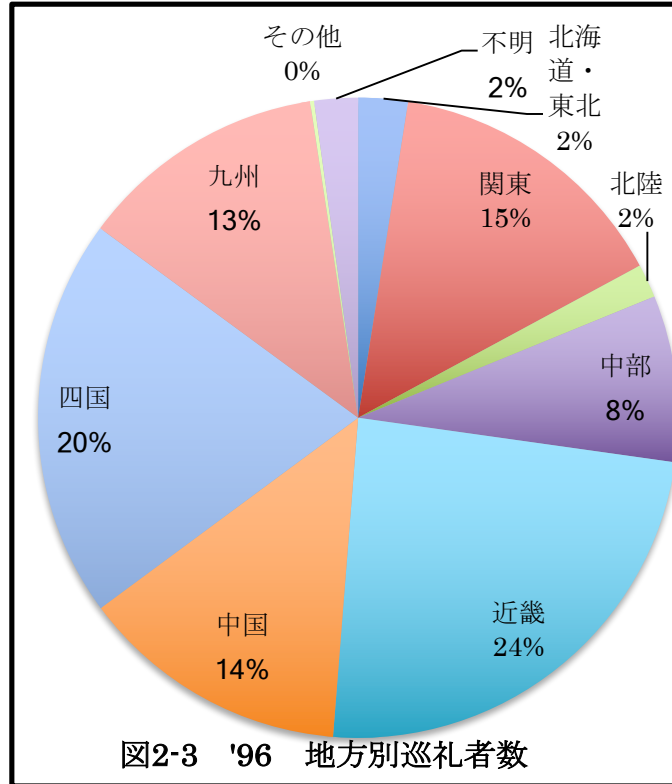


表2-1 '96 都道府県・地方別巡礼者

	現住所のある 都道府県			現住所のある 地域	
	度数	%		度数	%
不明	27	2.2%	北海道・東北	31	2.5%
北海道	18	1.5%	関東	181	14.6%
青森県	2	0.2%	北陸	21	1.7%
岩手県	2	0.2%	中部	104	8.4%
宮城県	3	0.2%	近畿	297	24.0%
秋田県	1	0.1%	中国	168	13.6%
山形県	3	0.2%	四国	250	20.2%
福島県	2	0.2%	九州	155	12.5%
茨城県	10	0.8%	その他	3	0.2%
栃木県	8	0.6%	不明	27	2.2%
群馬県	8	0.6%	合計	1237	100.0%
埼玉県	31	2.5%			
千葉県	40	3.2%			
東京都	54	4.4%			
神奈川県	30	2.4%			
新潟県	6	0.5%			
富山県	6	0.5%			
石川県	2	0.2%			
福井県	7	0.6%			
長野県	7	0.6%			
岐阜県	28	2.3%			
静岡県	11	0.9%			
愛知県	58	4.7%			
三重県	11	0.9%			
滋賀県	17	1.4%			
京都府	45	3.6%			
大阪府	153	12.4%			
兵庫県	42	3.4%			
奈良県	21	1.7%			
和歌山県	8	0.6%			
鳥取県	7	0.6%			
島根県	3	0.2%			
岡山県	71	5.7%			
広島県	35	2.8%			
山口県	52	4.2%			
徳島県	62	5.0%			
香川県	72	5.8%			
愛媛県	70	5.7%			
高知県	46	3.7%			
福岡県	82	6.6%			
佐賀県	19	1.5%			
長崎県	20	1.6%			
熊本県	19	1.5%			
大分県	12	1.0%			
宮崎県	3	0.2%			
沖縄県	2	0.2%			
ハワイ	1	0.1%			
合計	1237	100.0%			



4) 職業

次に回答者の職業を見ると、96年の調査では「無職」が35.4%でもっとも多く、「主婦」19.3%、「会社勤め」16.8%、「自営業」12.5%などが主な者であったが、本調査では「会社勤め」が33.3%と一番多く、次に「無職」15.2%、「主婦」8.6%、「自営業」「その他」ともに6.7%という順になっており、20年前と比較すると「会社勤め」の割合がかなり高くなったことが見て取れる。

男女別に見ると、96年の調査では男性では「無職」42.4%がトップであり、「会社勤め」24.0%、「自営業」16.0%であるのに対して女性は「主婦」38.5%を筆頭に「無職」28.8%、「会社勤め」10.1%、「自営業」9.0%となっていた（表2-7）。それに対し本調査では、男性、女性ともに「会社勤め」がトップであり、男性は「無職」24.4%、「自営業」、「その他」ともに8.9%となっており、女性は「主婦」18.4%、「学生」12.2%となっている（表2-8）。しかし年齢別に見ると、20歳代から50歳代までは「会社勤め」がすべて1位であるのに対し、60歳代以上になると「無職」が1位となる。（表2-9）

表2-3 '96 家族構成（含・性別）

	家族（配属者関係）					合計	
	不明	夫または妻がいる	夫または妻と死別した	夫または妻と離別した	結婚していない		
性別	不明	9 52.9% 15.5%	3 17.6% 0.4%	4 23.5% 1.8%	0 0.0% 0.0%	1 5.9% 0.8%	17 100.0% 1.4%
	男性	16 2.7% 27.6%	458 76.5% 58.0%	51 8.5% 22.4%	13 2.2% 30.2%	61 10.2% 51.3%	599 100.0% 48.4%
	女性	33 5.3% 56.9%	328 52.8% 41.6%	173 27.9% 75.9%	30 4.8% 69.8%	57 9.2% 47.9%	621 100.0% 50.2%
合計	58 4.7% 100.0%	789 63.8% 100.0%	228 18.4% 100.0%	43 3.5% 100.0%	119 9.6% 100.0%	1237 100.0% 100.0%	上段 実数 中段 横% 下段 縦%

表2-4 家族構成（含・性別）

配偶者関係	不明	夫または妻がいる	夫または妻と死別した	夫または妻と離別した	結婚していない	合計
不明	8 72.7% 57.1%	1 9.1% 2.0%	0 0% 0%	1 9.1% 14.3%	1 9.1% 3.3%	11 100.0% 10.8%
	4 9.1% 28.6%	28 63.6% 56.0%	0 0% 0%	1 2.3% 14.3%	11 25.0% 36.7%	44 100.0% 43.1%
女性	2 4.3% 14.3%	21 44.7% 42.0%	1 2.2% 100.0%	5 10.6% 71.4%	18 38.3% 60.0%	47 100.0% 46.1%
	14 13.7% 100.0%	50 49.0% 100.0%	1 1.0% 100.0%	7 6.9% 100.0%	30 29.4% 100.0%	102 100.0% 100.0%

表2-5 '96 家族構成 (含・年齢)

	家族(配偶者関係)				合計	配偶者関係	夫または妻がいる	夫または妻と死別した	夫または妻と離別した	結婚していない	不明	合計
	夫または妻がいる	夫または妻と死別した	夫または妻と離別した	結婚していない								
10歳代	1 25.0% 0.1%	1 25.0% 0.4%	0 0.0% 0.0%	2 50.0% 1.7%	4 100.0% 0.3%	~10代	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	3 75.0% 10.0%	1 25.0% 7.1%	4 100.0% 3.9%
20歳代	6 14.3% 0.8%	1 2.4% 0.4%	0 0.0% 0.0%	35 83.3% 29.4%	42 100.0% 3.6%	20代	1 14.3% 2.0%	0 0% 0%	0 0% 0%	6 85.7% 20.0%	0 0.0% 0.0%	7 100.0% 6.9%
30歳代	21 35.6% 2.7%	0 0.0% 0.0%	1 1.7% 2.3%	37 62.7% 31.1%	59 100.0% 5.0%	30代	4 33.3% 8.0%	0 0% 0%	1 8.3% 14.3%	7 58.3% 23.3%	0 0.0% 0.0%	12 100.0% 11.8%
40歳代	86 73.5% 10.9%	8 6.8% 3.5%	6 5.1% 14.0%	17 14.5% 14.3%	117 100.0% 9.9%	40代	11 64.7% 22.0%	0 0% 0%	1 5.9% 14.3%	5 29.4% 16.7%	0 0.0% 0.0%	17 100.0% 16.7%
50歳代	157 78.5% 19.9%	26 13.0% 11.4%	10 5.0% 23.3%	7 3.5% 5.9%	200 100.0% 17.0%	50代	7 30.4% 14.0%	1 4.3% 100.0%	4 17.4% 57.1%	6 26.1% 20.0%	5 21.7% 35.7%	23 100.0% 22.5%
60歳代	305 72.1% 38.7%	94 22.2% 41.2%	16 3.8% 37.2%	8 1.9% 6.7%	423 100.0% 35.9%	60代	18 94.7% 36.0%	0 0% 0%	0 0% 0%	1 5.3% 3.3%	0 0.0% 0.0%	19 100.0% 18.6%
70歳代	150 63.6% 19.0%	74 31.4% 32.5%	5 2.1% 11.6%	7 3.5% 5.9%	236 100.0% 20.0%	70代	5 83.3% 10.0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0.0% 0.0%	1 16.7% 7.1%	6 100.0% 5.9%
80歳以上	7 38.9% 0.9%	10 55.6% 4.4%	1 5.6% 2.3%	0 0.0% 0.0%	18 100.0% 1.5%	不明	4 28.6% 8.0%	0 0% 0%	1 7.1% 14.3%	2 14.3% 6.7%	7 50.0% 50.0%	14 100.0% 13.7%
不明	56 70.0% 7.1%	14 17.5% 6.1%	4 5.0% 9.3%	6 7.5% 5.0%	80 100.0% 6.8%	合計	50 49.0% 100.0%	1 1.0% 100.0%	7 6.9% 100.0%	30 29.4% 100.0%	14 13.7% 100.0%	102 100.0% 100.0%

上段 実数
中段 横%
下段 縦%

表2-6 家族構成 (含・年齢)

表2-7 '96 性別と職業

職業		性別			合計
		不明	男性	女性	
職業	不明	7 21.9% 41.2%	9 28.1% 1.5%	16 50.0% 2.6%	32 100.0% 2.6%
	会社勤め	1 0.5% 5.9%	144 69.2% 24.0%	63 30.3% 10.1%	208 100.0% 16.8%
	自営業	3 1.9% 17.6%	96 61.9% 16.0%	56 36.1% 9.0%	155 100.0% 12.5%
	農林漁業	1 1.9% 5.9%	28 52.8% 4.7%	24 45.3% 3.9%	53 100.0% 4.3%
	公務員	0 0.0% 0.0%	15 55.6% 2.5%	12 44.4% 1.9%	27 100.0% 2.2%
	教員	0 0.0% 0.0%	2 40.0% 0.3%	3 60.0% 0.5%	5 100.0% 0.4%
	無職	5 1.1% 29.4%	254 58.0% 42.4%	179 40.9% 28.8%	438 100.0% 35.4%
	主婦	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	239 100.0% 38.5%	239 100.0% 19.3%
	学生	0 0.0% 0.0%	3 75.0% 0.5%	1 25.0% 0.2%	4 100.0% 0.3%
	その他	0 0.0% 0.0%	36 56.3% 6.0%	28 43.8% 4.5%	64 100.0% 5.2%
	僧侶	0 0.0% 0.0%	12 100.0% 2.0%	0 0.0% 0.0%	12 100.0% 1.0%
	合計	17 1.4% 100.0%	599 48.4% 100.0%	621 50.2% 100.0%	1237 100.0% 100.0%

表2-8 性別と職業

職業	男	女	不明	合計
不明	4 28.6% 8.9%	2 14.3% 4.1%	8 57.1% 72.7%	14 100.0% 13.3%
会社勤め	18 51.4% 40.0%	16 45.8% 32.7%	1 3.0% 9.0%	35 100.0% 33.3%
自営業	4 57.1% 8.9%	3 42.9% 6.1%	0 0.0% 0.0%	7 100.0% 6.7%
農林漁業	1 50.0% 0.2%	0 0.0% 0.0%	1 50.0% 9.1%	2 100.0% 1.9%
公務員	3 50.0% 6.7%	3 50.0% 6.1%	0 0.0% 0.0%	6 100.0% 5.7%
教員	0 0.0% 0.0%	3 100.0% 6.1%	0 0.0% 0.0%	3 100.0% 2.9%
無職	11 68.8% 24.4%	4 25.0% 8.2%	1 6.3% 9.1%	16 100.0% 15.2%
主婦	0 0.0% 0.0%	9 100.0% 18.4%	0 0.0% 0.0%	9 100.0% 8.6%
学生	0 0.0% 0.0%	6 100.0% 12.2%	0 0.0% 0.0%	6 100.0% 5.7%
その他	4 57.1% 8.9%	3 42.9% 6.1%	0 0.0% 0.0%	7 100.0% 6.7%
合計	45 42.9% 100.0%	49 46.7% 100.0%	11 10.5% 10.5%	105 100.0% 100.0%

上段 実数
中段 横%
下段 縦%

表 2-9 年齢別職業

	会社勤め	自営業	農林漁業	公務員	教員	無職	主婦	学生	その他	不明	合計
～10代	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	3 75.0% 50.0%	0 0.0% 0.0%	1 25.0% 7.1%	4 100.0% 3.8%
20代	2 28.6% 5.7%	0 0.0% 0.0%	1 14.3% 50.0%	1 14.3% 16.7%	0 0.0% 0.0%	1 14.3% 6.7%	0 0.0% 0.0%	2 28.6% 33.3%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	7 100.0% 6.7%
30代	9 75.0% 25.7%	1 8.3% 14.3%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	1 8.3% 11.1%	0 0.0% 0.0%	1 8.3% 14.3%	0 0.0% 0.0%	12 100.0% 11.4%
40代	9 45.0% 25.7%	3 15.0% 42.9%	0 0.0% 0.0%	2 10.0% 33.3%	2 10.0% 66.7%	1 5.0% 6.7%	2 10.0% 22.2%	1 5.0% 16.7%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	20 100.0% 19.0%
50代	8 36.4% 22.9%	2 9.1% 28.6%	0 0.0% 0.0%	1 4.5% 16.7%	1 4.5% 33.3%	2 9.1% 13.3%	2 9.1% 22.2%	0 0.0% 0.0%	1 4.5% 14.3%	5 22.7% 35.7%	22 100.0% 21.0%
60代	4 21.1% 11.4%	1 5.3% 14.3%	0 0.0% 0.0%	1 5.3% 16.7%	0 0.0% 0.0%	8 42.1% 53.3%	3 15.8% 33.3%	0 0.0% 0.0%	2 10.5% 28.6%	0 0.0% 0.0%	19 100.0% 18.1%
70代	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	3 42.9% 20.0%	1 14.3% 11.1%	0 0.0% 0.0%	2 28.6% 28.6%	1 14.3% 7.1%	7 100.0% 6.7%
不明	3 23.1% 8.6%	0 0.0% 0.0%	1 14.3% 50.0%	1 7.7% 16.7%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	1 7.7% 14.3%	7 53.8% 50.0%	13 100.0% 12.4%
計	35 33.3% 100.0%	7 6.7% 100.0%	2 1.9% 100.0%	6 5.7% 100.0%	3 2.9% 100.0%	15 14.3% 100.0%	9 8.6% 100.0%	6 5.7% 100.0%	7 6.7% 100.0%	14 13.3% 100.0%	105 100.0% 100.0%

上段 実数
中段 横%
下段 縦%

'96 年齢別職業

	職業										合計
	不明	会社勤め	自営業	農林漁業	公務員	無職	主婦	学生	その他	僧侶	
10歳代	0 0.0% 0.0%	1 25.0% 0.5%	1 25.0% 0.6%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	1 25.0% 0.2%	0 0.0% 0.0%	1 25.0% 25.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	4 100.0% 0.3%
20歳代	0 0.0% 0.0%	13 31.0% 6.3%	2 4.8% 1.3%	0 0.0% 0.0%	5 11.9% 18.5%	6 14.3% 1.4%	2 4.8% 0.8%	3 7.1% 75.0%	9 21.4% 14.1%	1 2.4% 8.3%	42 100.0% 3.4%
30歳代	2 3.4% 6.3%	29 49.2% 13.9%	4 6.8% 2.6%	0 0.0% 0.0%	1 1.7% 3.7%	5 8.5% 1.1%	8 13.6% 3.3%	0 0.0% 0.0%	6 10.2% 9.4%	4 6.8% 33.3%	59 100.0% 4.8%
40歳代	2 1.7% 6.3%	50 42.0% 24.0%	22 18.5% 14.2%	4 3.4% 7.5%	9 7.6% 33.3%	14 11.8% 3.2%	10 8.4% 4.2%	0 0.0% 0.0%	6 5.0% 9.4%	1 0.8% 8.3%	119 100.0% 9.6%
50歳代	0 0.0% 0.0%	59 29.5% 28.4%	30 15.0% 19.4%	5 2.5% 9.4%	7 3.5% 25.9%	23 11.5% 5.3%	7 3.5% 25.9%	0 0.0% 0.0%	15 7.5% 23.4%	3 1.5% 25.0%	200 100.0% 16.2%
60歳代	13 2.9% 40.6%	33 7.3% 15.9%	51 11.4% 32.9%	27 6.0% 28.3%	3 0.7% 11.1%	206 45.9% 47.0%	102 22.7% 42.7%	0 0.0% 0.0%	14 3.1% 21.9%	0 0.0% 0.0%	449 100.0% 36.3%
70歳代	5 2.0% 15.6%	8 3.2% 3.8%	32 12.8% 20.6%	15 6.0% 28.3%	1 0.4% 3.7%	139 55.6% 31.7%	38 15.2% 15.9%	0 0.0% 0.0%	10 4.0% 15.6%	2 0.8% 16.7%	250 100.0% 20.2%
80歳以上	0 0.0% 0.0%	1 5.0% 0.5%	2 10.0% 1.3%	1 6.0% 28.3%	0 0.0% 0.0%	12 60.0% 2.7%	4 20.0% 1.7%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	0 0.0% 0.0%	20 100.0% 1.6%
不明	10 10.6% 31.3%	14 14.9% 6.7%	11 11.7% 7.1%	1 1.1% 1.9%	1 1.1% 3.7%	32 34.0% 7.3%	18 19.1% 7.5%	0 0.0% 0.0%	4 4.3% 6.3%	1 1.1% 8.3%	94 100.0% 7.6%
合計	32 2.6% 100.0%	208 16.8% 100.0%	155 12.5% 100.0%	53 4.3% 100.0%	27 2.2% 100.0%	438 35.4% 100.0%	239 19.3% 100.0%	4 0.3% 100.0%	64 5.2% 100.0%	12 1.0% 100.0%	1237 100.0% 100.0%

上段 実数: 中段 横%: 下段 縦%

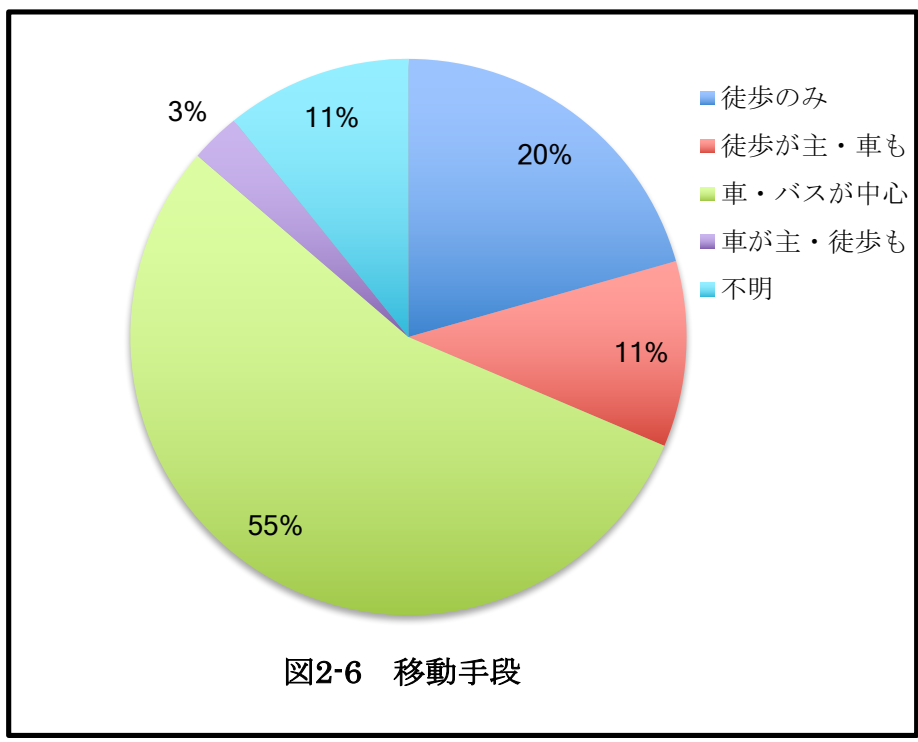
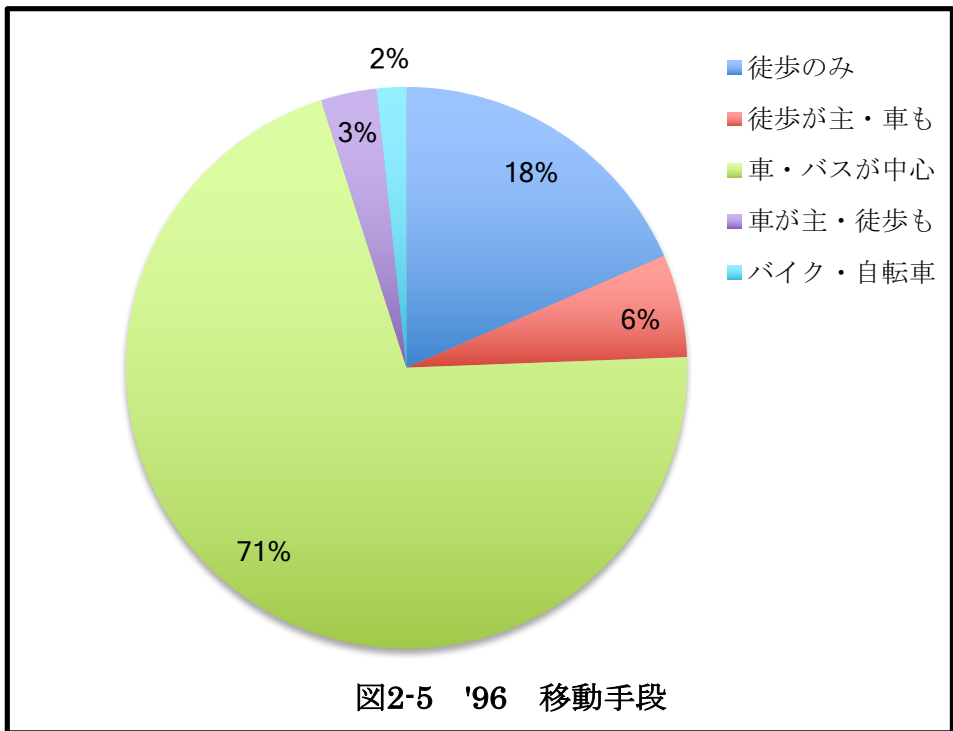
5)移動手段

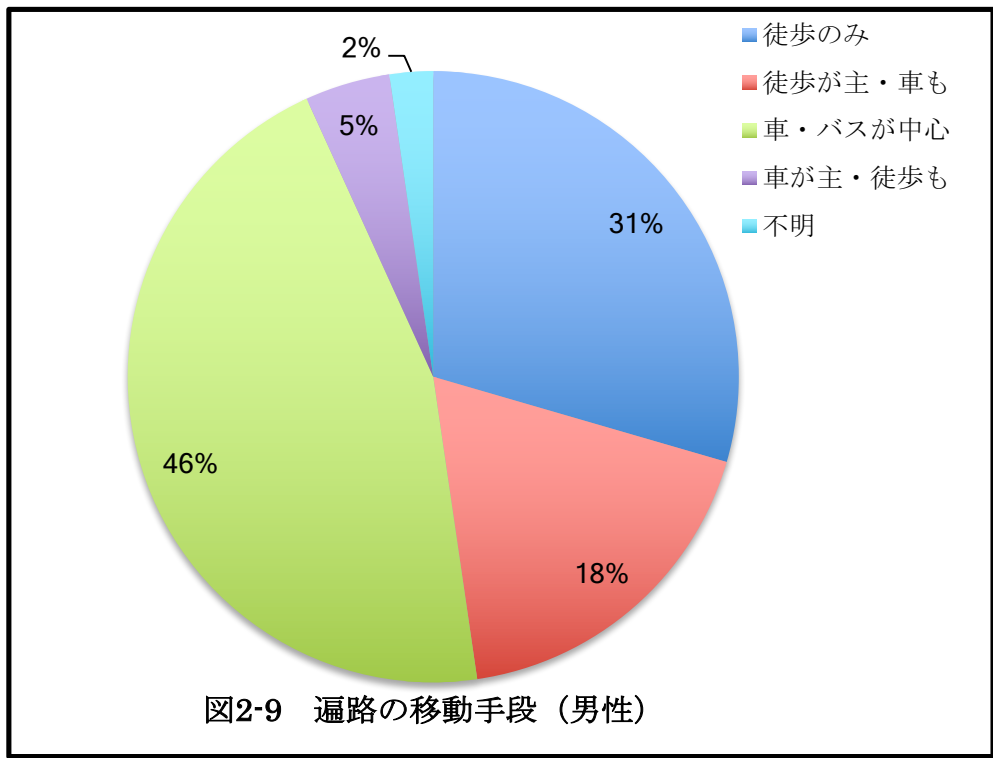
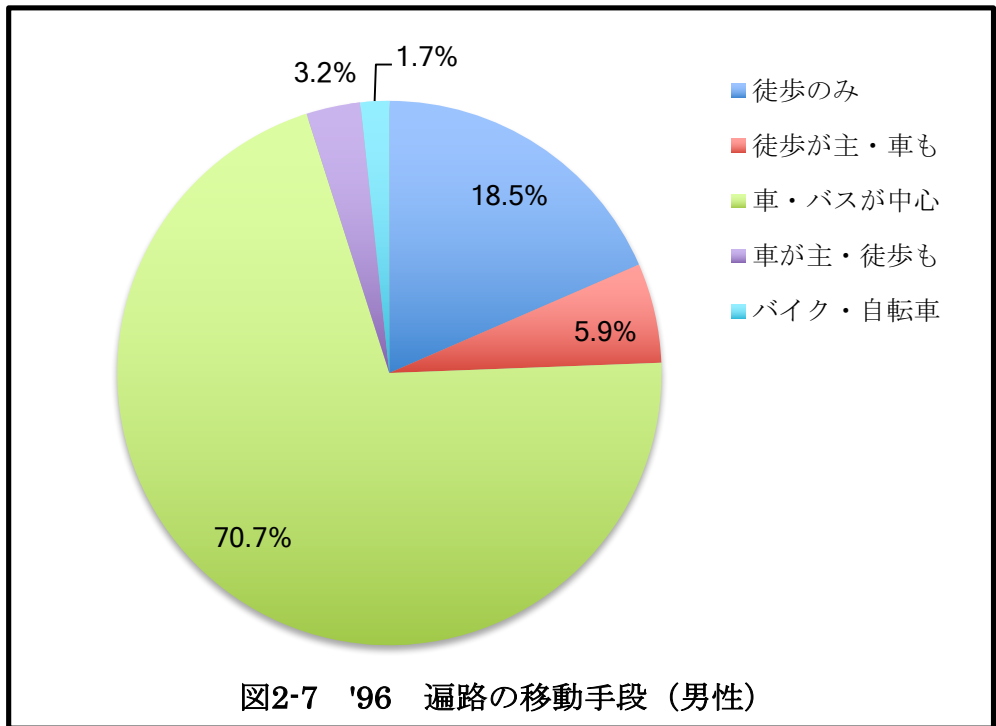
ここでは、現代遍路の考察に不可欠な遍路の移動手段に関連した実態について概観してみる。日本の社会の産業化に伴うモータリゼーションの影響により、四国遍路を行う者の移動手段は車や大型バスが主となっているが、研究の背景で述べたように、1990年代以降、脱工業化や近代文明批判などの一般社会の価値観の変換や、メディアに四国遍路が取り上げられることが増えたことにより、四国遍路を行う徒歩巡礼者が復活・増加してきている[浅川 2008]ことも確かだ。そこで、本問では遍路を徒歩で実践するのか車で実践するのかという基本的な移動手段について質問をした。

96年の調査では、「車・バスなどを中心」とする遍路が78.9%で約8割をしめており（図2-5）、これに対して「徒歩のみ」の純粋徒歩遍路は10.8%で約1割程度であった。この結果に対して本調査の結果をみると、図2-6からわかるように、「車・バスなどを中心」とする遍路は54.9%で約5割となっており、これに対して「徒歩のみ」の純粋徒歩遍路は20.6%で約2割程度を占めている。そして残りの1割程度（13.7%）が「徒歩が主だが、車や鉄道も乗る」と「車・鉄道が主で、場所によって歩く」の併用派となっている。このことから、純粋徒歩遍路が2割程度存在し、車等との併用の遍路も徒歩遍路であると考えれば、3割以上の巡礼者が歩いていることがみてとれ、これは本調査が一部の札所のみでアンケート調査を行ったということも考慮しても、徒歩巡礼者の割合は全体の約1割であるとする俗説よりもかなり多くの徒歩遍路が存在すると言えるだろう。20年前の調査と比較すると、純粋徒歩遍路だけでも1割増加していることがわかり、徒歩遍路を行う巡礼者の増加傾向が見て取れる。

次に、移動手段を性別からみると、96年の調査では徒歩遍路は男性遍路が多く、女性の徒歩遍路が3.7%であるのに対して男性は18.4%であり、女性のほぼ5倍に匹敵する。さらに「徒歩が主だが、車や鉄道も乗る」遍路を考慮すると、男性遍路の約1/4が多かれ少なかれ徒歩遍路を実践している徒歩遍路派であることがみてとれた（図2-7,8）。しかし本調査では、「徒歩のみ」での純粋徒歩巡礼者之割合は男性が29%、女性が17%となっており20年前と比べると女性の割合が約5倍にもなっていることがみてとれる（図2-9,10）。

また、移動手段を年齢別でみると、96年の調査では年齢の若いものほど徒歩遍路するものの比率が高い傾向が認められ、「徒歩のみ」遍路は、10～20歳代では20%を越えているが、年齢が高くなる程围うし、60歳代では10%を割っている（表2-10）。それに対して本調査は、徒歩やバイク・自転車での巡礼を行う者は若い世代に多いのだが、「徒歩のみ」遍路でみると40～60代も比較的多く、60歳代は2割を越えている。また、乗用車を利用する巡礼者は中年層が高く、これは、中年層はみなまだ働いているおりに休日を利用しての区切り打ちをする場合が多いため、時間に余裕がないことも一つの要因ではないかと筆者は考える（表2-11）。





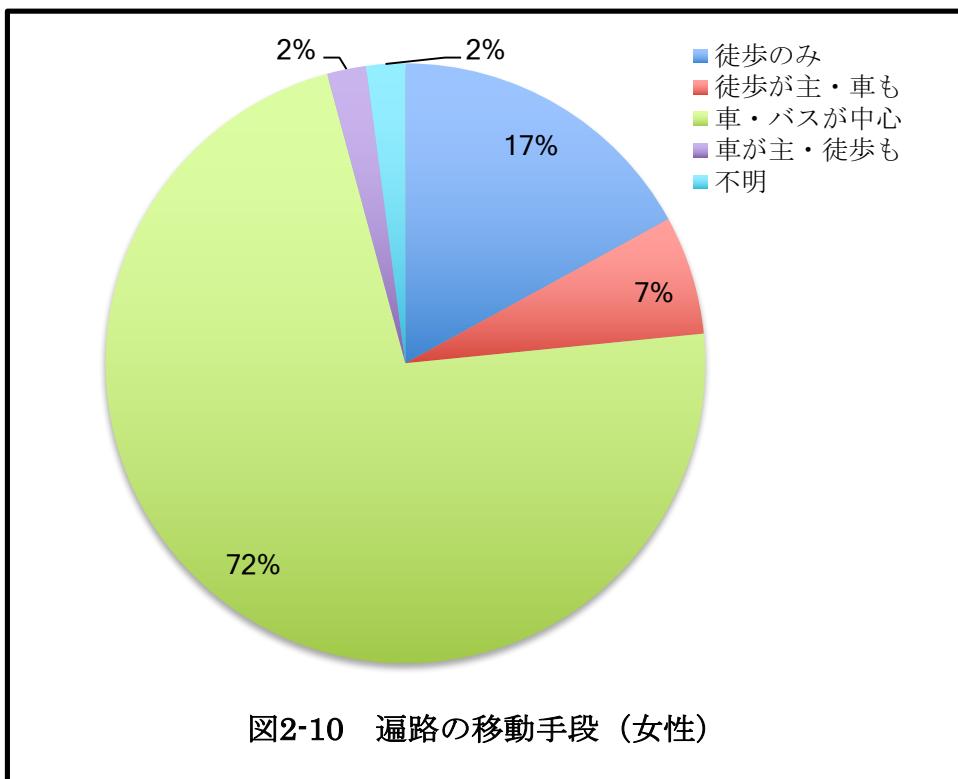
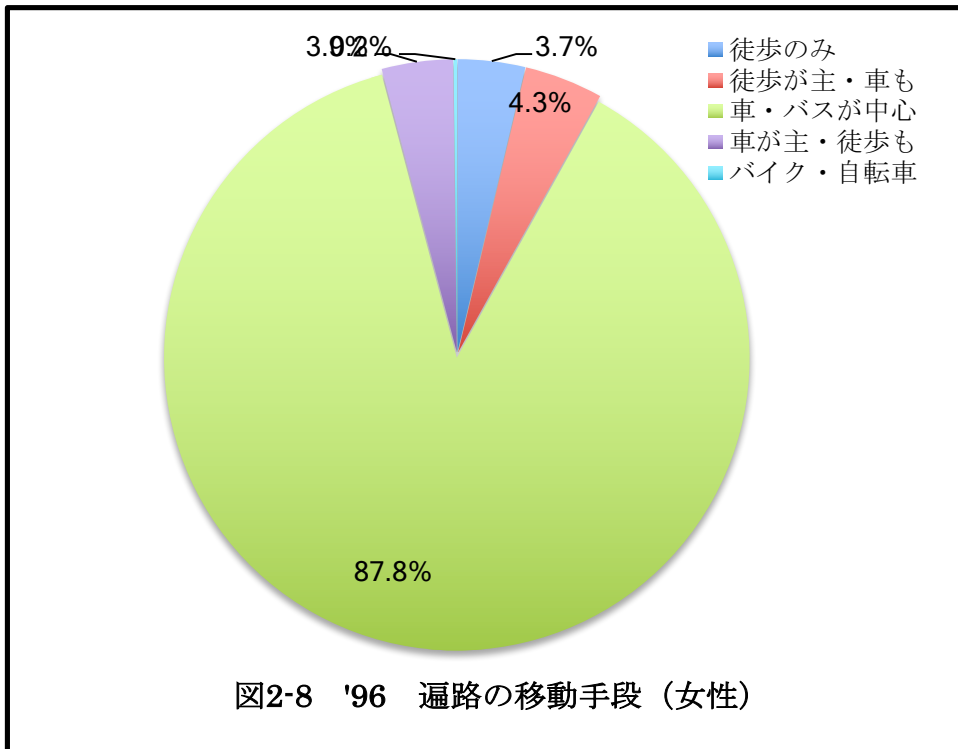


表 2-10 '96 年齢と移動手段（上段＝度数、下段＝年齢の％）

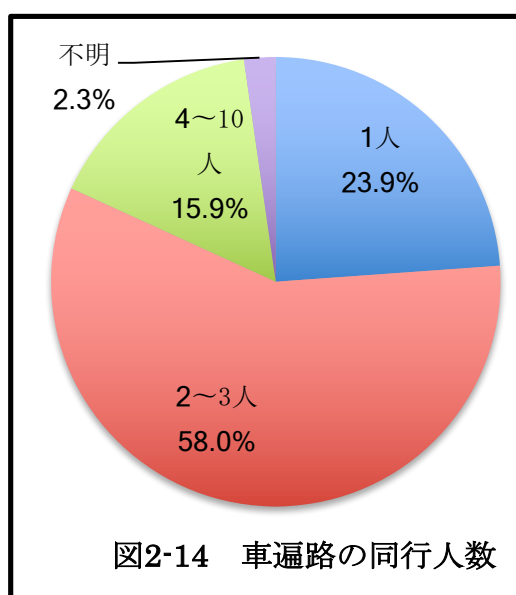
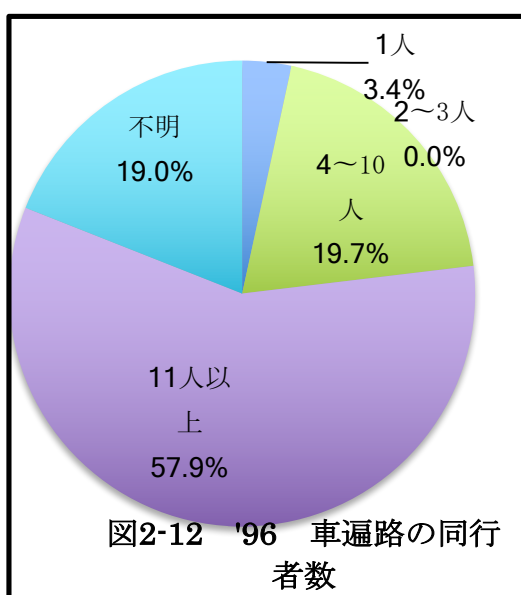
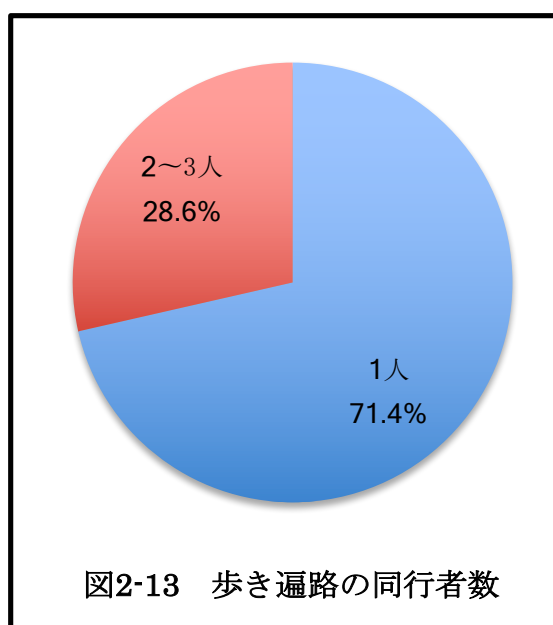
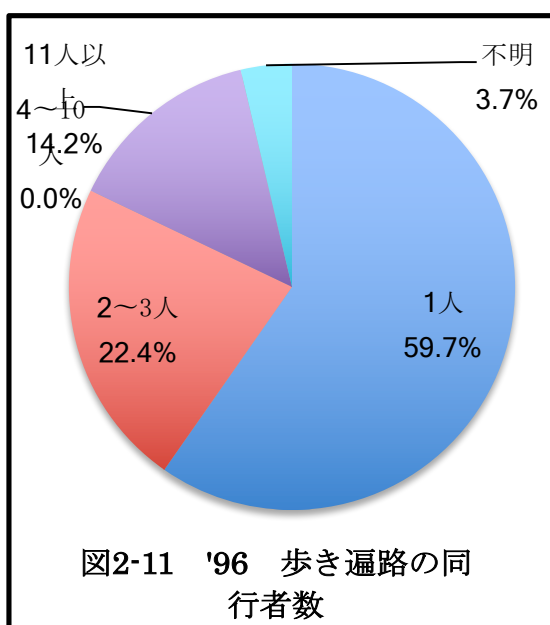
		主な乗り物							主な乗り物		合計
		徒歩	大型バス	マイクロバス	乗用車	タクシー	バイク・自転車	電車・路線バス	その他		
年齢	10歳代	度数 年齢の％	0 0.0%	2 66.7%	0 0.0%	1 33.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 100.0%
	20歳代	度数 年齢の％	0 0.0%	12 37.5%	0 0.0%	11 34.4%	0 0.0%	3 9.4%	6 18.8%	0 0.0%	32 100.0%
	30歳代	度数 年齢の％	0 0.0%	18 37.5%	3 6.3%	18 37.5%	3 6.3%	2 4.2%	4 8.3%	0 0.0%	48 100.0%
	40歳代	度数 年齢の％	1 1.0%	32 33.3%	9 9.4%	36 37.5%	5 5.2%	4 4.2%	9 9.4%	0 0.0%	96 100.0%
	50歳代	度数 年齢の％	2 1.2%	63 37.5%	27 16.1%	49 29.2%	13 7.7%	4 2.4%	9 5.4%	1 0.6%	168 100.0%
	60歳代	度数 年齢の％	4 1.0%	194 47.8%	79 19.5%	59 14.5%	44 10.8%	5 1.2%	21 5.2%	0 0.0%	406 100.0%
	70歳代	度数 年齢の％	2 0.8%	121 51.1%	54 22.8%	25 10.5%	29 12.2%	1 0.4%	5 2.1%	0 0.0%	237 100.0%
	80歳以上	度数 年齢の％	0 0.0%	14 70.0%	3 15.0%	1 5.0%	2 10.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	20 100.0%
	不明	度数 年齢の％	1 1.2%	39 47.6%	14 17.1%	10 23.2%	6 7.3%	1 1.2%	1 1.2%	1 1.2%	82 100.0%
合計	度数 年齢の％	10 0.9%	495 45.3%	189 17.3%	219 20.1%	102 9.3%	20 1.8%	55 5.0%	2 0.2%	1092 100.0%	

表 2-11 年齢と移動手段（上段＝度数、下段＝年齢の％）

遍路の移動手段	徒歩	大型バス	マイクロバス	乗用車	タクシー	バイク・自転車	電車・路線バス	その他	不明	合計
～10代	2 33.3%	0 0.0%	0 0.0%	2 3.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 33.3%	6 100.0%
20代	1 12.5%	0 0.0%	0 0.0%	4 50.0%	0 0.0%	2 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 12.5%	8 100.0%
30代	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 58.3%	0 0.0%	2 16.7%	2 16.7%	1 8.3%	0 0.0%	12 100.0%
40代	6 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	10 41.7%	0 0.0%	2 8.3%	0 0.0%	0 0.0%	6 25.0%	24 100.0%
50代	5 18.5%	0 0.0%	0 0.0%	11 40.7%	1 3.7%	2 7.4%	0 0.0%	1 3.7%	7 25.9%	27 100.0%
60代	6 24.0%	0 0.0%	0 0.0%	9 36.0%	1 4.0%	1 4.0%	2 8.0%	0 0.0%	6 24.0%	25 100.0%
70代	1 12.5%	1 12.5%	0 0.0%	3 37.5%	0 0.0%	0 0.0%	2 25.0%	0 0.0%	1 12.5%	8 100.0%
不明	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 28.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	10 71.4%	14 100.0%
合計	21 16.9%	1 0.8%	0 0.0%	50 40.3%	2 1.6%	9 7.3%	6 4.8%	2 1.6%	33 26.6%	124 100.0%

6) 遍路の同行者

ここでは、歩き遍路と車遍路での同行者の人数を比較していく。20年前の調査の結果をみても、歩き遍路は1人で行っている人が1番多く59.7%、2~3人が22.4%、11人以上が14.2%となっており(図2-11)、車遍路は11人以上が1番多く57.9%、4~10人が19.7%、1人が3.4%となっていた(図2-12)。それに対して本調査の結果では、歩き遍路は1人で行っている人が71.4%と圧倒的に多く、次に2~3人が28.6%であり(図2-13)、車遍路は2~3人が1番多く58%、次に1人が23.9%、4~10人が15.9%となった(図2-14)。本調査では少人数での巡礼者を対象としてアンケート調査を実施したため、バスツアーで訪れている集団の巡礼者などにはアンケートを行っておらず、そのため11人以上の同行者の巡礼者は存在しなかったが、それを考慮したとしても20年前と比較して1人での巡礼者が増加していることは一目瞭然だ。

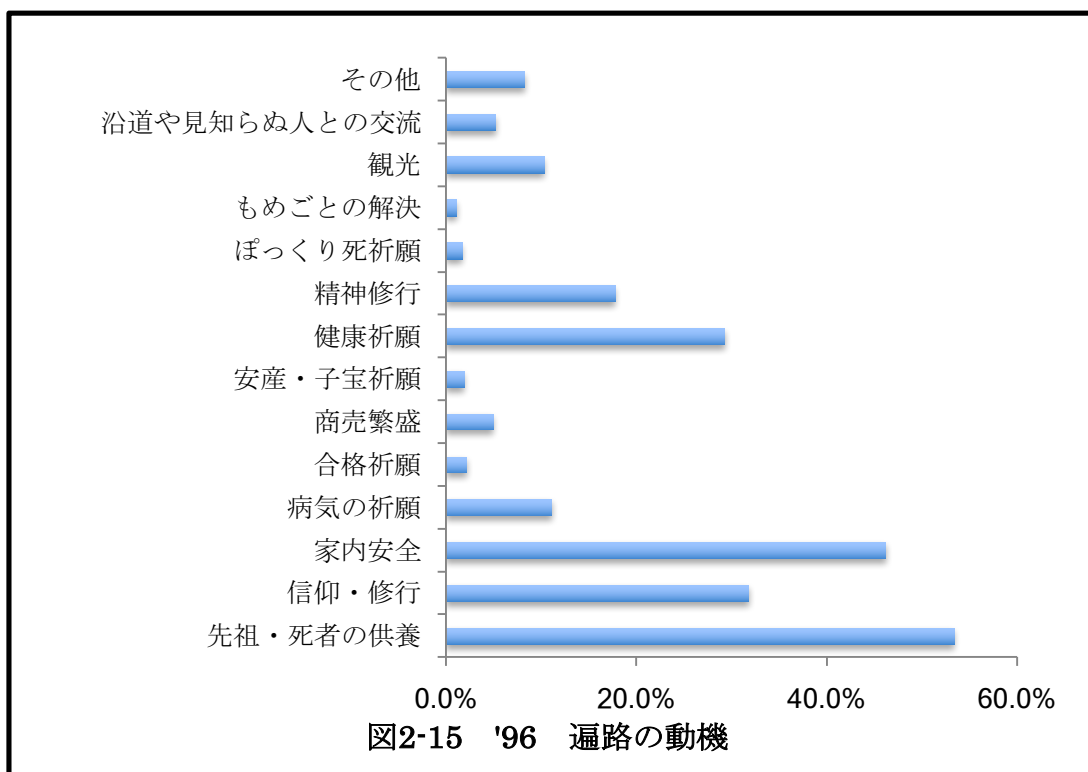


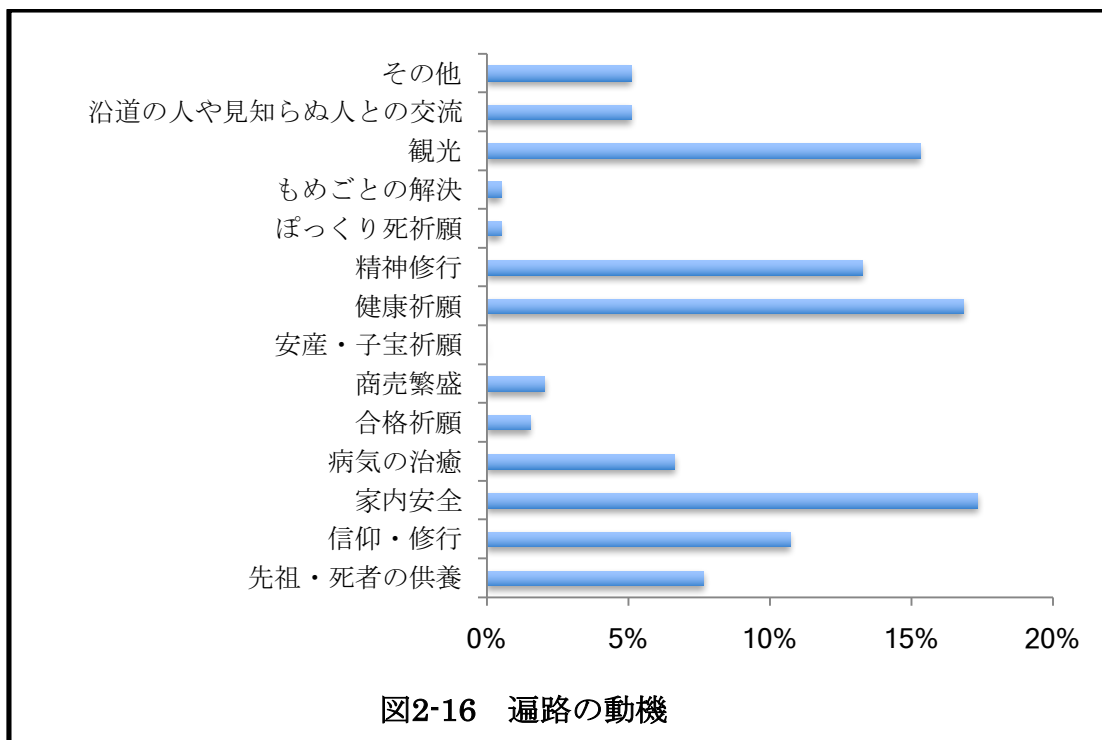
第3節 遍路に対する意識

1) 遍路動機

かつて四国遍路には、「職業遍路」といういわゆる「乞食遍路」が存在しており、彼らは家が貧しく口減らしのために遍路にださされた者もいれば、ハンセン病によって村落共同体から追い出される形で遍路になった者も少なくなかった。しかし現在、徒歩で巡礼を行う理由として、「お四国病」と呼ばれるものや「自分探し」を目的としてあげられることが多々ある。では、実際に遍路の動機はどのようなものがあるのかを過去の早稲田のアンケート調査と比較していきたい。

まず、「今回の遍路の主な動機はなんですか」、という問いに対して、「先祖・死者の供養」「信仰・修行」「家内安全」「病気の治癒」「合格祈願」「商売繁盛」「安産・子宝祈願」「健康祈願」「精神修養」「ぼっくり死祈願」「もめごとの解決」「観光」「沿道の人や見知らぬ人との交流」「その他」という14の選択肢を用意し、あてはまるものを3つまで答えてもらった。その結果、96年の調査では、「先祖・死者の供養」が53.4%で一番多く、以下、「家内安全」46.2%、「健康祈願」29.3%、「精神修行」17.8%の順に高いパーセンテージを得ているが(図2-15)、本調査では、「家内安全」(17.3%)が一番多く、以下、「健康祈願」(16.8%)、「観光」(15.3%)、「精神修養」(13.3%)、「信仰・修行」(10.7%)の順に高いパーセンテージを得ている(図2-16)。この結果をみると、20年前は先祖供養や信仰といった宗教的な意味合いをもった動機の巡礼者が多かったが、現在はそのような宗教的な意味合いをもった動機の巡礼者は少なく、観光や精神修養といった宗教以外の動機の巡礼者が多いことが見て取れる。

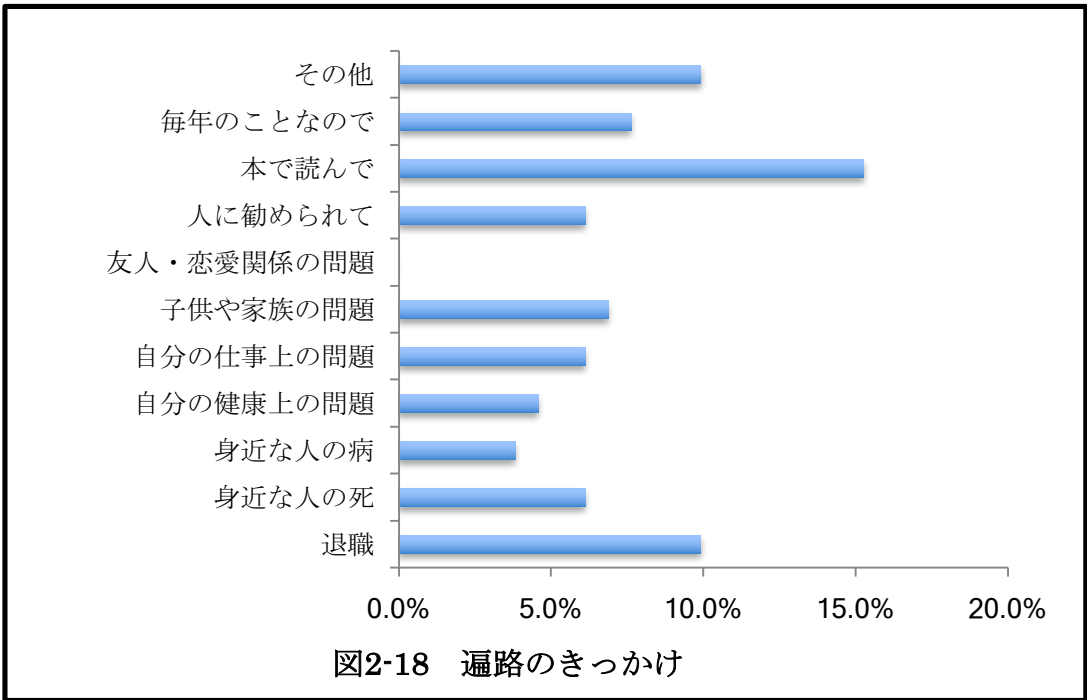
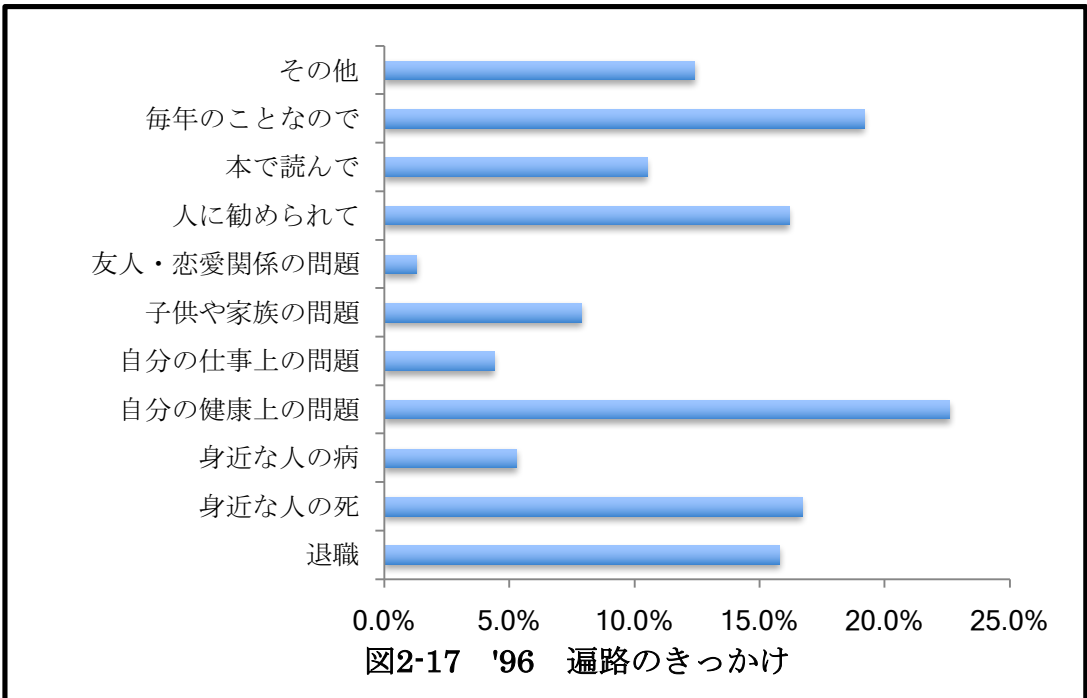




2) 遍路のきっかけ

遍路の動機と遍路のきっかけはまた別で、動機は行動を起こさせる心的な要因であるのに対し、きっかけは物事をはじめの手がかりとなる客観的な出来事のことだ。きっかけが動機を育むこともあるが、動機がまずあり、きっかけがあることで行動に移すという場合もある。たとえば、家族などの身近な人が病気になったため病気の治癒祈願のために四国遍路を思い立ったという場合は前者にあたり、かねてから精神修養をしたいと考えていたところ、テレビで四国遍路の番組をみて、歩いてまわることを決意した、という場合は後者にあたる。

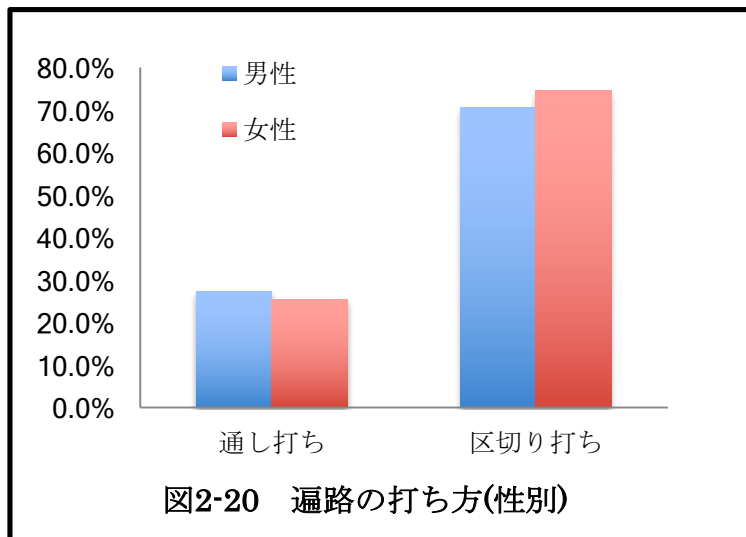
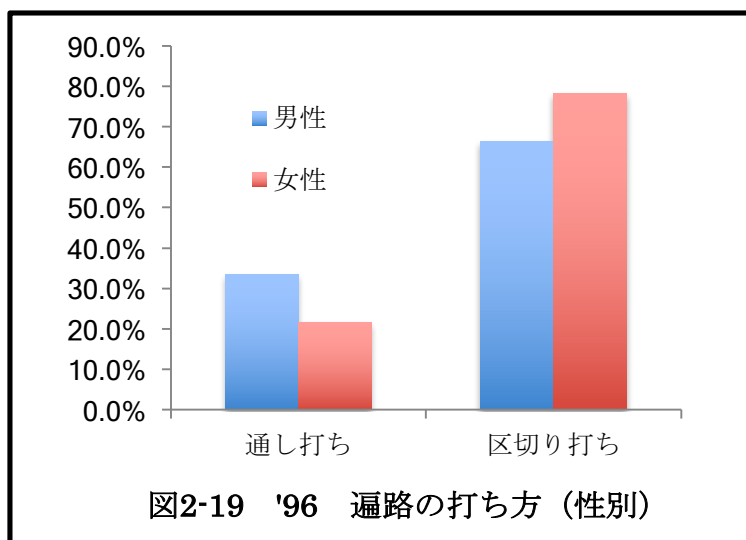
本アンケートでは、「今回の遍路のきっかけになったことは何かありますか」という問いについて「退職」「身近な人の死」「身近な人の病」「自分の健康上の問題」「自分の仕事上の問題」「子供や家族の問題」「友人・恋愛関係の問題」「人に勧められて」「本などで読んで」「毎年のことなので」「その他」の12の選択肢を用意し、あてはまるものをすべて選んでもらい、結果は以下の通りである。96年の調査では、「自分の健康上の問題」(22.6%)がトップで、以下、「毎年のことなので」(19.2%)、「身近な人の死」(16.7%)、「人に勧められて」(16.2%)、「退職」(15.8%)といったものが続いているのに対し(図2-17)、「本で読んで」(15.3%)がトップで、以下、「退職」(9.9%)、「毎年のことなので」(7.6%)、「子供や家族の問題」(6.6%)、といったものが続いている(図2-18)。20年前の調査では健康祈願が上位であり、その他にも「身近な人の死」をきっかけとしているなど、宗教的な意味合いのきっかけを持った者が多かったが、本調査では自分の健康上の問題をきっかけとしている人の割合は高くなく、本などの文献やメディアの影響で巡礼をする者が多いことがわかる。



3) 遍路の打ち方

アンケート結果から遍路の打ち方を見てみると、96年の調査では「通し打ち」は27.7%、「区切り打ち」は71.1%であり、本調査では「通し打ち」は全体の27.5%、「区切り打ち」は全体の71.6%となっていたため、「通し打ち」と「区切り打ち」の比率は20年前とあまり変化がないが、圧倒的に「区

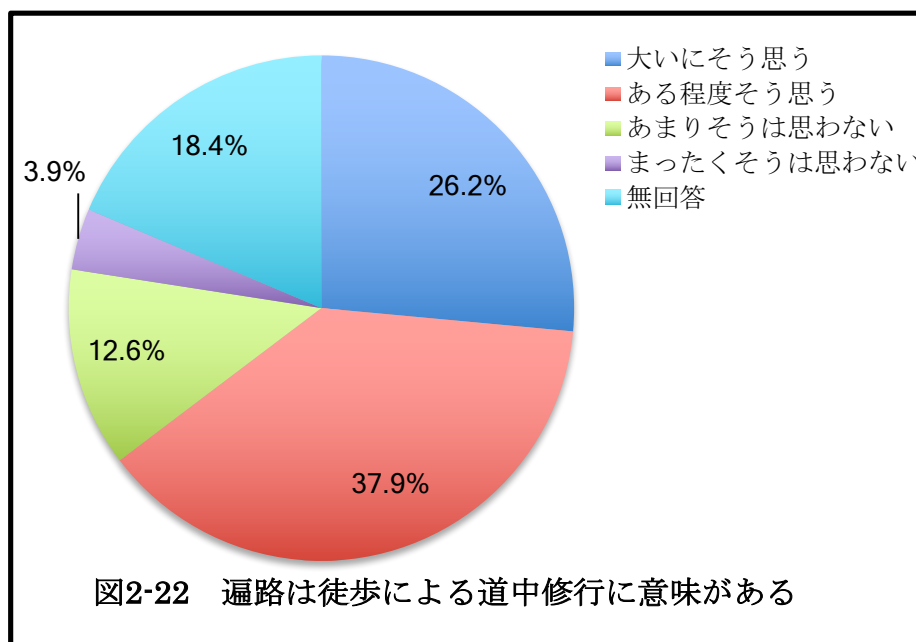
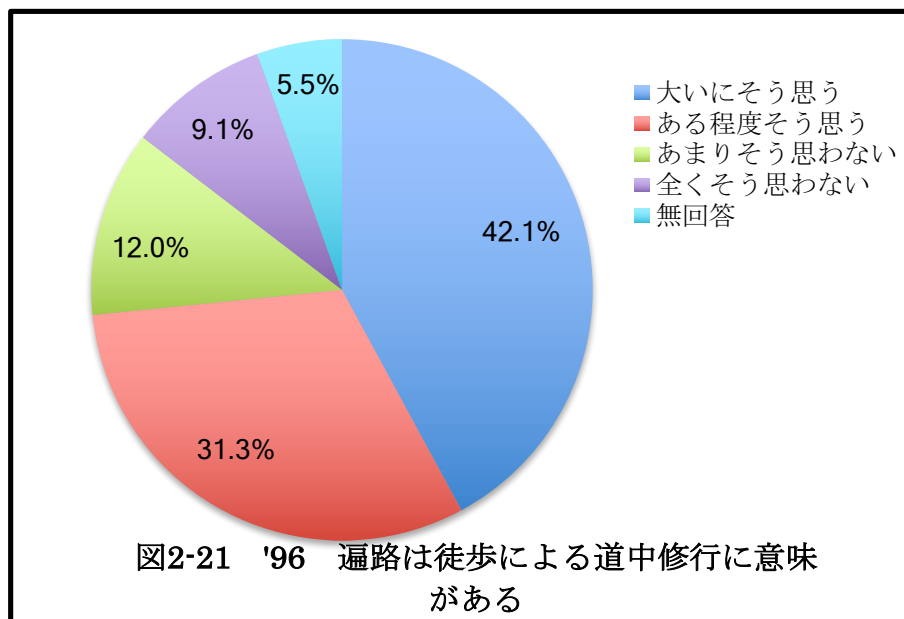
切り打ち」の方が多いことがわかる。また、男女別に見てみると、96年の調査では、「通し打ち」は、男性が33.6%、女性が21.7%となっており、「区切り打ち」は、男性が66.4%、女性が78.3%となっていたが(図2-19)、本調査では「通し打ち」は、男性が27.3%、女性が25.5%となっており、「区切り打ち」は、男性が70.5%、女性が74.5%となっていることから、20年前と比較して「通し打ち」を行う男性の割合が低くなり、女性の割合が高くなったことがわかり、男女の割合の差が縮まったことが見て取れる(図2-20)。



4) 徒歩遍路に対する意識

この問いでは、巡礼者の歩き遍路に対する意識を調査するため、「遍路は徒歩による道中修行にこそ本来の意味がある」という質問をし、「大いにそう思う」、「ある程度そう思う」、「あまりそうは思わない」、「まったくそうは思わない」の4つの選択肢から答えてもらった。その結果、96年の調査では、「大いにそう思う」が42.1%、「ある程度そう思う」が31.3%、「あまりそう思わない」が12.0%、「まったくそう思わない」が9.1%となり、7割以上の巡礼者が遍路は徒歩であるからこそ意味があると考

えていることがわかった（図 2-21）。それに対して本調査の結果では、「大いにそう思う」が 26.2%、「ある程度そう思う」が 37.9%、「あまりそう思わない」が 12.6%、「まったくそう思わない」が 3.9%となっており（図 2-22）、一見徒歩での巡礼にこそ意味があると考えられる割合が減ったように見えるが、無回答の票の割合が高かったため、徒歩での遍路に重要性を感じていない巡礼者の割合をみると、20 年前の調査に比べて徒歩での遍路に重要性を感じていない巡礼者の割合が減っていることが見て取れる。



第4節 小活

本章では、6番札所安楽寺、17番札所井戸寺、23番札所薬王寺にて行った全巡礼者を対象としたアンケート調査の結果と、その基となった1996年の早稲田大学道空間研究会の実施したアンケート調査の結果を比較することで、時代による巡礼者の人物像、また巡礼者の四国遍路に対する意識の変化を見てきた。まず巡礼者の人物像から比較してみると、20年前と現在では、遠方からの巡礼者の割合が高くなり、また独身男女の巡礼者の割合が高くなっていることがわかった。これは、交通機関の発達により、遠方から四国にくることが比較的容易になったからではないかと考えられる。

また、20年前は退職をして無職となった高齢層の巡礼者の割合が高かったが、現在は会社勤めの中年層の巡礼者の割合が高くなっている。移動手段においては、20年前は8割近くが車やバスなどの公共交通機関を利用した遍路であり、徒歩での巡礼者は1割程度であったが、現在では徒歩での巡礼者が2割以上となっており、車と徒歩の併用の巡礼者も含めると3割以上の巡礼者が徒歩で巡礼を行っていることがわかり、このことから近年徒歩巡礼者が増加していることが見て取れる。さらに、徒歩巡礼者のうち女性の割合も20年前と比較して格段に増加したことが見て取れる。次に遍路に対する意識の変化として、遍路の動機をみると、20年前は「先祖供養」などの宗教的な意味合いをもった動機の割合が高かったのに比べ、現在は「先祖供養」の割合は低くなり、「観光」や「精神修行」などの割合が高くなっていることが見て取れる。しかし、ここで「精神修行」とは一体何なのだろうかという疑問がうかんだ。「精神修行」を動機とする割合は高くなっているが、これは「信仰・修行」とは別のカテゴリーであるため、宗教的な意味合いとはまた別であると考えられるが、ではこれは世俗的な意味合いの動機なのだろうか。このことについてはアンケート調査では詳しく読みとることができないため、徒歩巡礼者に対して直接聞き取り調査を実施した。この聞き取り調査については、5章で詳しく述べていく。

また、徒歩遍路に対する意識を比較してみると、20年前の調査結果と比べて本調査の結果は徒歩遍路にこそ遍路の意味があると考える人の割合はあまり変化がみられなかったが、同行者の人数を比較してみると、歩き遍路・車遍路ともに1人での巡礼者の割合が20年前よりも増加していることがみてとれ、このことから旅の個人化が進んでいるのではないかということが言える。

そして最後に、徒歩遍路に対する意識の調査として、遍路は徒歩による道中修行にこそ意味があると考えかどうかを質問してみたところ、徒歩遍路にこそ意味があるとは考えない人の割合が20年前に比べて本調査の方が低くなっていたため、歩いて巡礼を行うことに意味を見いだしている人が増加したと考えられる。これらのことを踏まえ、次章では徒歩巡礼者に焦点をあて車を利用した巡礼者との人物像や遍路に対する意識の違いをみていく。

第4章 “旅人の宿 道しるべ” における徒歩巡礼者の実態

第1節 調査概要

筆者は、第1章で近年増加傾向にある徒歩巡礼者の中には、信仰心を持った宗教的な意味合いで巡礼を行う者だけでなく、“バックパッカー”のような、自分探しや人との出会いなどの経験を目的として巡礼を行っている者も多いのではないかという仮説をたてた。それに伴い、“バックパッカー”が宿泊をするであろう安宿（＝民宿）にて、徒歩巡礼者に対してアンケート調査を実施した。アンケート項目は、早稲田大学道空間研究会（以下、早稲田）の実施したアンケートを基に、自由記述欄を付け加えたアンケートを作成した。

本章では、宿に宿泊している徒歩巡礼者を対象としたアンケートと、札所に訪れる徒歩を含めたすべての巡礼者を対象としたアンケートの結果を比較し、徒歩でお遍路を行っている巡礼者の人物像や遍路の動機、遍路に対する意識を明らかにしていく。

1) 調査対象地 “旅人の宿 道しるべ”

本調査では、徳島県徳島市板野町にある「旅人の宿 道しるべ」という宿に協力をして頂き、アンケート調査を実施した。調査地設定の理由としては、近辺に札所があること、宿の主人が遍路経験者であり、宿泊者も四国遍路を行っている巡礼者が多いこと、旅館とは違い、家を改装して宿を営んでいるため団体よりも個人の巡礼者の宿泊が多いことが挙げられる。

旅人の宿 道しるべは、2004年から営業している民宿であり、笠井隆志さんが1人で営んでいる。笠井さんはもともと宿を営みたかったのだが、一度は地方の銀行に就職をし、その後銀行を辞めてからユースホステルの経営者として日本各地で働いた。そして地元の徳島に戻って現在の宿を営んでいるのだが、宿を営む際に立地が高速道路のインターチェンジの近辺であること、駅が近くにあること、札所の近くであることという条件を考慮した。宿泊者の内訳は、6割が四国遍路の巡礼者であり、2割が家族連れ、1割が団体、1割が個人となる。宿泊状況としては、四国遍路のシーズン中である3～5月はほぼ毎日満室であり、7月や8月は学校の団体予約や阿波踊りの観光客の予約が多く、10月～12月は再び四国遍路のシーズンであるため満室の日が続くが、6～9月は比較的に予約が少ない。巡礼者の宿泊者の年齢層は高く、50歳以上の方がほとんどであり、夫婦での宿泊も多いが半数は1人での宿泊があり、1人での宿泊の場合9割が男性である。また、巡礼者の宿泊者は、9割は初めての宿泊だが、1割はリピーターであり、半分は徒歩での巡礼者であるとのことだ。そして巡礼者が宿泊をする際、次回巡礼をする時にスムーズに始めることができるよう菅笠や金剛杖などを宿で預かるサービスを行っている。

道しるべは、和室4部屋、洋室2部屋の全6部屋で定員19名の宿泊施設であり、個室として主に和室を利用し、家族や夫婦、グループでの宿泊の場合は和室での宿泊となることが多い。また、空室がある場合は1名でも和室に宿泊することも可能である。しかし、1名での宿泊の場合、大抵は相部屋となり、その場合は男女別で主に洋室での宿泊となる。また、「健康増進法」に基づき全館禁煙となっているため、喫煙室を設け、分煙を行っている。宿泊のチェックインは16:00から、チェックアウトは10:00までとなっており、門限は23:00となっている。

また、客室の他に、食堂・談話室も設けられており、宿泊者同士が交流をすることが可能だ。食堂では最大12名まで一緒に食事をすることができ、また食事や飲み物の持ち込みも可能である。食堂・

談話室は、食事提供時間以外は自由に利用することができ、消灯時間も設定していない。食事提供時間は、夕食は18:30（変更あり）、朝食は6:30～8:00となっている。宿泊者が自由に過ごしてもらえるよう、談話室では一期一会の出会いを大切にしている(旅人の宿 道しるべHP)。

その他の館内設備としては、浴室・洗面・お手洗いはすべて共同であり部屋への備え付けはないが、洗濯機・乾燥機は無料で自由に利用することができる。また、全館冷暖房完備であり、食堂には持ち込み用冷蔵庫・電子レンジ・自動販売機・テレビ・ビデオ・図書・子供用ゲーム・エアコンが備え付けてあり、客室には各部屋に寝具・エアコン・テレビ・洋服掛けが備え付けてある。客室には浴衣・タオル・歯ブラシ・カミソリの備え付けがないため、持参するかもしれない各100円で販売も行っており、バスタオル・タオルは1日各100円、浴衣は1日300円でレンタルもやっている。

宿泊料金は素泊まりで、1部屋あたり1名で宿泊の場合4,200円、2名で7,350円、3名で9,450円、4名で10,500円となっている。また、相部屋の場合、1名で2,625円、団体での貸し切りの場合、57,750円となる。食事を希望する場合、1名あたり夕食が1,050円、朝食が525円となる。宿泊料金の割引サービスも行っており、自転車・バイクで宿まで来た方、徳島ヴォルティス観戦を目的としての宿泊の方は500円引き、学生は200円引きなどの割引を行っている。



(和室・定員3名/筆者撮影)



(洋室・定員3名/筆者撮影)



(食堂・談話室/筆者撮影)

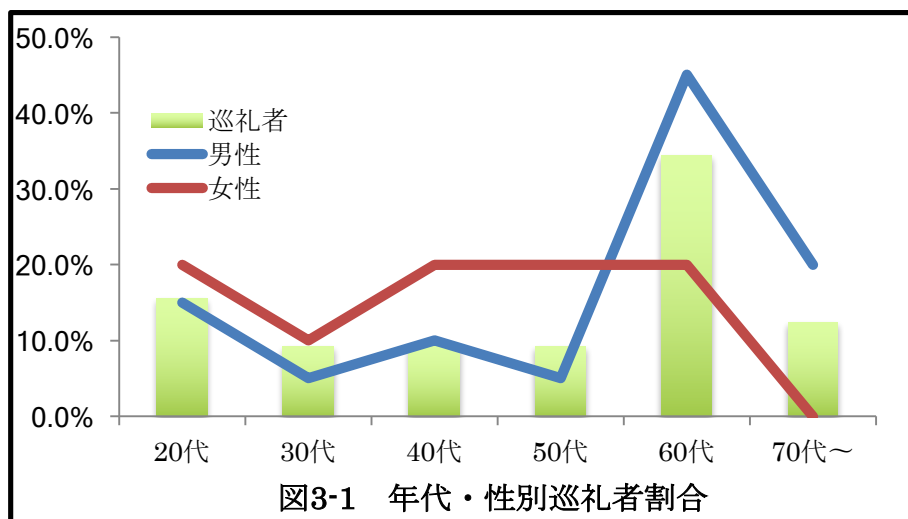


(談話スペース/筆者撮影)

第2節 調査対象者の基本属性

1) 性別・年齢

本調査での回答者の性別は男性が62.5%、女性が31.3%であった。また年齢は、22歳から78歳となり平均年齢が53.1歳となっている。本調査でもっとも多かった年齢層は60歳代の34.4%、2番目が20歳代の15.6%、3番目が70歳代12.5%と続いている。男女別に見てみると男性は60歳代が45%と1番多く、次に70歳代が20%、20歳代が15%と続いているが女性は20歳代・30歳代・40歳代・50歳代がともに20%となっており、これらのことから男性は高齢層が多く、女性は若年層が多いことがみてとれる(図3-1)。

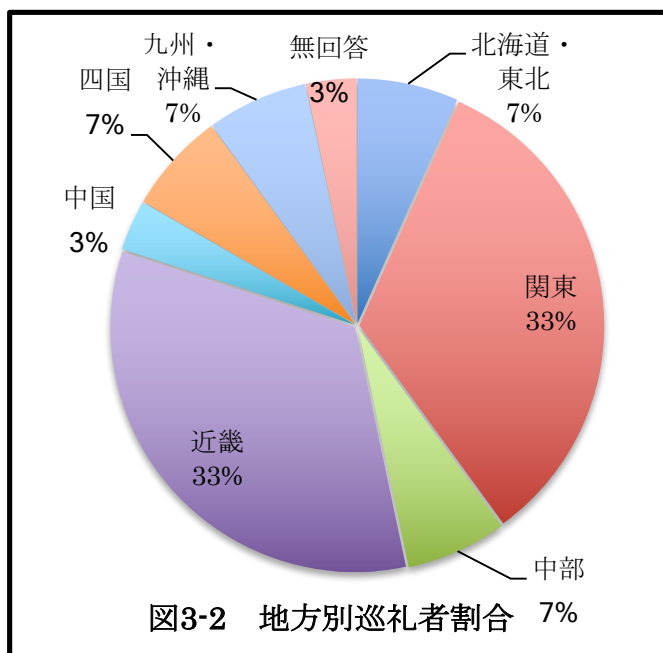


2) 現住地

本調査の回答者の現住地を地域別にみると、関東、近畿がともに33%、つづいて北海道・東北、中部、四国、九州・沖縄がすべて7%となっており、中国が3%となっている(図3-2)。さらに詳しく県別に多い順に見ると、兵庫県・奈良県が9.4%と1番多く、続いて東京都、神奈川県、千葉県、栃木県、大阪府、京都府が6.3%となっている(表3-1)。今回のアンケート調査では、宿泊している巡礼者を対象としたため、四国出身の巡礼者は少なく、関東・近畿出身の巡礼者が目立った。

表3-1 都道府県別・地方別巡礼者数

県	度数	割合	地方	度数	割合
北海道	1	3.1%	北海道・東北	2	6.3%
宮城県	1	3.1%	関東	10	31.3%
東京都	2	6.3%	中部	2	6.3%
神奈川県	2	6.3%	近畿	10	31.3%
千葉県	2	6.3%	中国	1	3.1%
埼玉県	1	3.1%	四国	2	6.3%
栃木県	2	6.3%	九州・沖縄	2	6.3%
茨城県	1	3.1%	無回答	1	3.1%
石川県	1	3.1%	合計	32	100.0%
岐阜県	1	3.1%			
大阪府	2	6.3%			
京都府	2	6.3%			
奈良県	3	9.4%			
兵庫県	3	9.4%			
山口県	1	3.1%			
香川県	1	3.1%			
愛媛県	1	3.1%			
福岡県	1	3.1%			
沖縄県	1	3.1%			
無回答	1	3.1%			
合計	32	100.0%			



3) 家族構成 (配偶者関係)

家族関係については、札幌でのアンケート同様あまり詳しい質問は差し控え、配偶者関係に限定している。本調査では全体の50%が「夫または妻がいる」と答えており、次に「結婚していない」(31.3%)、「夫または妻と離別した」(6.3%)と続いていることから、札幌での前巡礼者を対象としたアンケート調査と同様に独身男女の巡礼者の割合が高いことが見て取れる。

男女別に見ると、男性は「妻がいる」が1位で65%、つづいて「結婚していない」が30%、「妻と離別した」が5%となっており、既婚者が多いことが見て取れるが、女性は「結婚していない」が40%と1番割合が高く、つづいて「夫がいる」が30%、「夫と離別した」が10%となっており、独身の割合が高いことがわかる(表3-2)。

年齢別に見ると、20歳代・30歳代はみな未婚者であったが、40歳代以上は6割以上が「夫または妻がいる」と答えており、未婚者は50歳代と60歳代に各1人となっているため、若い独身男女と既婚者の高齢層の割合が高いことが見て取れる(表3-3)。

4) 職業

次に回答者の職業を見ると、無職が53.1%と

1番高く、続いて会社勤めが15.6%、自営業・学生・その他がともに6.3%と続いている(表2-4)。また、性別にみても、男性は無職が60.0%で1番高く、つづいて会社勤めが15%、自営業・農林漁業・学生・その他がともに5%となっているのに対して、女性は無職が1番高い割合だがその値は30%と男性に比べると低く、つづいて会社勤めが20%、自営業・公務員・主婦・学生・その他がともに10%となっている(表3-4)。年齢別にみると、20歳代は学生もしくは無職であり、30歳代は会社勤めではないが働いているという方が多く、40歳代・50歳代は会社勤めが多かったが、60歳代以降は退職をして無職である方がほとんどであったことが見て取れる(表3-5)。

表3-2 配偶者関係 (含・性別)

配偶者関係	不明	夫または妻がいる	夫または妻と離別した	夫または妻と死別した	結婚していない	合計	
不明	2 100% 50%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	2 100% 6.3%	
男性	0 0% 0%	13 65% 81.3%	1 5% 50%	0 0% 0%	6 30% 60%	20 100% 62.3%	
女性	2 20% 50%	3 30% 18.8%	1 10% 50%	0 0% 0%	4 40% 40%	10 100% 31.3%	
合計	4 12.5% 100%	16 50% 100%	2 6.3% 100%	0 0% 0%	10 31.3% 100%	32 100% 100%	上段 実数 中段 横% 下段 縦%

表 3-3 配偶者関係 (含・年齢)

配偶者関係	不明	夫または妻がいる	夫または妻と離別した	夫または妻と死別した	結婚していない	合計
不明	3 100% 75%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	3 100% 9.4%
20代	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	5 100% 50%	5 100% 15.6%
30代	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	3 100% 30%	3 100% 9.4%
40代	1 33.3% 25%	2 66.7% 12.5%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	3 100% 9.4%
50代	0 0% 0%	2 66.7% 12.5%	0 0% 0%	0 0% 0%	1 33.3% 10%	3 100% 9.4%
60代	0 0% 0%	9 81.8% 56.3%	1 9.1% 50%	0 0% 0%	1 9.1% 10%	11 100% 34.4%
70代	0 0% 0%	3 75% 18.8%	1 25% 50%	0 0% 0%	0 0% 0%	4 100% 12.5%
合計	4 12.5% 100%	16 50% 100%	2 6.3% 100%	0 0% 0%	10 31.3% 100%	32 100% 100%

表 3-4 性別職業表

職業	男性	女性	不明	合計
会社勤め	3 60% 15%	2 40% 20%	0 0% 0%	5 100% 15.6%
自営業	1 50% 5%	1 50% 10%	0 0% 0%	2 100% 6.3%
農林漁業	1 100% 5%	0 0% 0%	0 0% 0%	1 100% 3.1%
公務員	0 0% 0%	1 100% 10%	0 0% 0%	1 100% 3.1%
教員	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%
無職	12 70.6% 60.0%	3 17.6% 30%	2 11.8% 100.0%	17 100% 53.1%
主婦	0 0% 0%	1 100% 10%	0 0% 0%	1 100% 3.1%
学生	1 50% 5%	1 50% 10%	0 0% 0%	2 100% 6.3%
その他	1 50% 5%	1 50% 10%	0 0% 0%	2 100% 6.3%
不明	1 100% 5%	0 0% 0%	0 0% 0%	1 100% 3.1%
合計	20 62.5% 100.0%	10 31.3% 100.0%	2 6.3% 100.0%	32 100% 100%

上段 実数
中段 横%
下段 縦%

表 3-5 年齢別職業

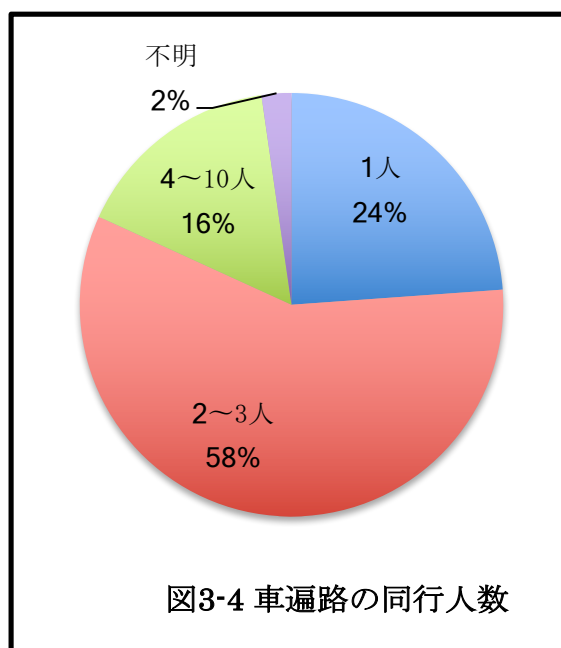
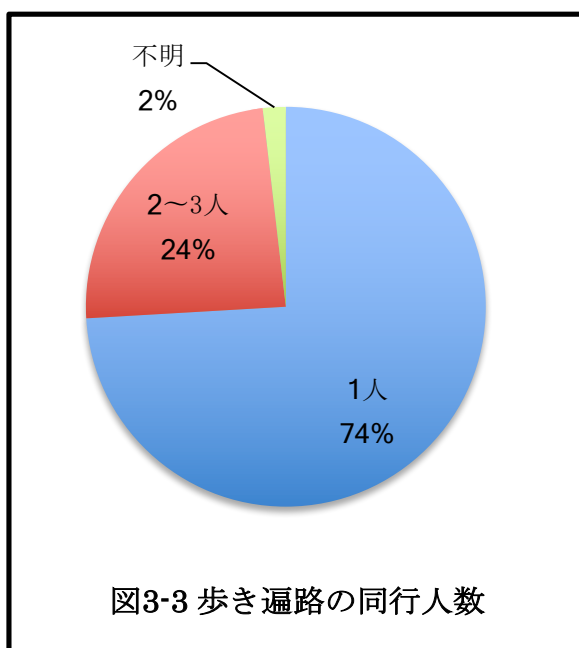
職業	会社勤め	自営業	農林漁業	公務員	教員	無職	主婦	学生	その他	不明	合計
20歳代	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	3 60% 17.6%	0 0% 0%	2 40% 100%	0 0% 0%	0 0% 0%	5 100% 15.6%
30歳代	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	1 33.3% 100%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	2 66.7% 100%	0 0% 0%	3 100% 9.4%
40歳代	3 100% 60%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	3 100% 9.4%
50歳代	2 66.7% 40%	1 33.3% 50%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	3 100% 9.4%
60歳代	0 0% 0%	1 9.1% 50%	1 9.1% 100%	0 0% 0%	0 0% 0%	7 63.6% 41.2%	1 9.1% 100%	0 0% 0%	0 0% 0%	1 9.1% 100%	11 100% 34.4%
70歳代	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	4 100% 23.5%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	4 100% 12.5%
不明	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	3 100% 17.6%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	0 0% 0%	3 100% 9.4%
合計	5 15.6% 100%	2 6.3% 100%	1 3.1% 100%	1 3.1% 100%	0 0% 0%	17 53.1% 100%	1 3.1% 100%	2 6.3% 100%	2 6.3% 100%	1 3.1% 100%	32 100% 100%

上段 実数
中段 横%
下段 縦%

5) 遍路の同行者

ここで、歩き遍路と車遍路の同行者の人数と内訳を比較する。この比較では、札所でのアンケートの集計結果と宿でのアンケートの集計結果を合計して比較を行っている。その結果、徒歩で巡礼を行っている者は74%が1人で巡礼しており、24%が2～3人となっている(図3-3)のに対し、車で巡礼を行っている者は1人が24%、2～3人が58%、4～10人が16%となっており(図3-4)、徒歩での巡礼者は明らかに1人で巡礼を行っている割合が高いということが見て取れる。

徒歩巡礼者の同行者の内訳をみると、自分のみ(74%)、夫婦(11%)、友人(9%)、親族(2%)、不明(4%)となっている(図3-5)。それに対して車での巡礼者の同行者の内訳をみると、夫婦(25%)、自分のみ(24%)、親子(23%)、友人(12%)、兄弟(6%)、講仲間(3%)、親族(1%)、その他(1%)、不明(5%)となっており(図2-6)、徒歩では「自分のみ」の次に「夫婦」が多く、その次に「友人」となっていたのに対し、車では「夫婦」の割合が1番高く、その次に「自分のみ」、「親子」、「友人」となっており、徒歩で巡礼を行う場合身内よりも友人と行う割合が高いのに対し車で巡礼を行う場合は身内と行うことが多いのがわかる。



第3節 徒歩巡礼者の遍路に対する意識

1) 遍路の打ち方

アンケート結果から遍路の打ち方を見てみると、「通し打ち」は全体の25%、「区切り打ち」は全体の75%となっており、札所でのアンケート同様圧倒的に「区切り打ち」の方が多くことがわかる。また、男女別に見てみると「通し打ち」は男性が35.0%、女性が10.0%となっており、男性の方が高い割合となっているが、札所のアンケート結果と比較してみると、男性の割合が少しではあるが高くなっており、女性の割合が低くなっていることがみてとれる(図3-7)。

ここで、札幌で行ったアンケート調査における、性別移動手段と遍路の打ち方の比較をみると、女性が通し打ちをする場合、徒歩では14.3%、車では14.8%となっており、若干ではあるがやはり車でを行う者が多いのに対して、男性が通し打ちをする場合、徒歩では19.0%、車では16.7%となっており、徒歩で行う者が多いことがみてとれる(図3-8)。このことから、やはり歩き遍路となると女性が通し打ちをすることは体力的に厳しいものがあり、割合は低くなっているということが見て取れる。

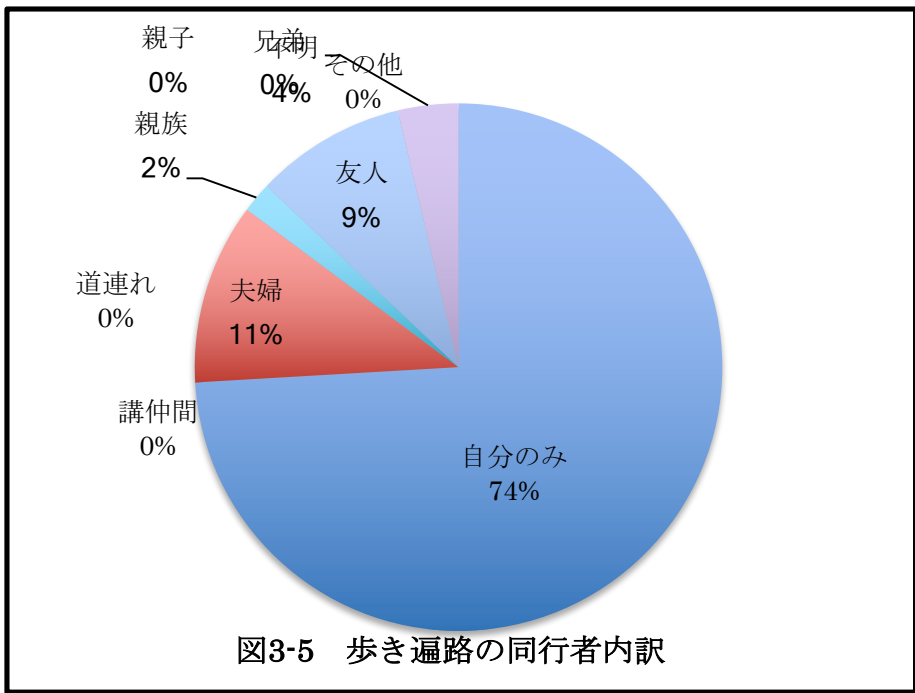


図3-5 歩き遍路の同行者内訳

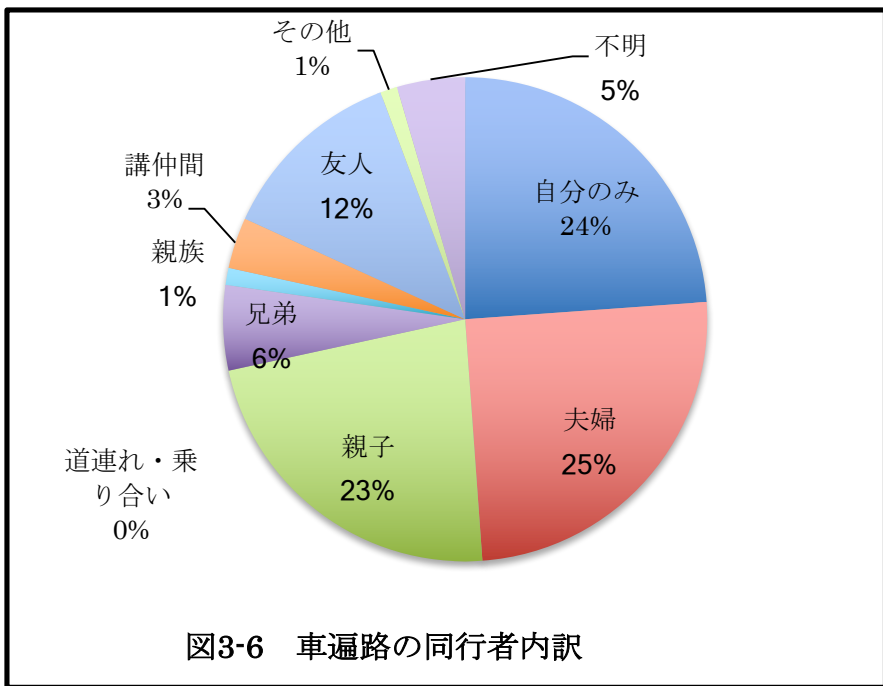
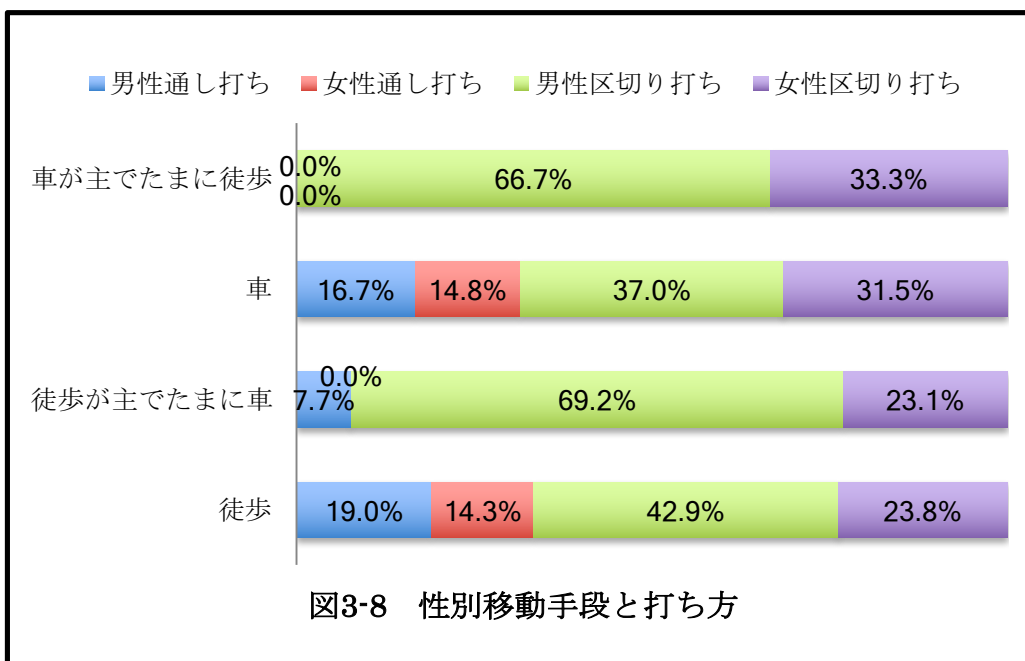
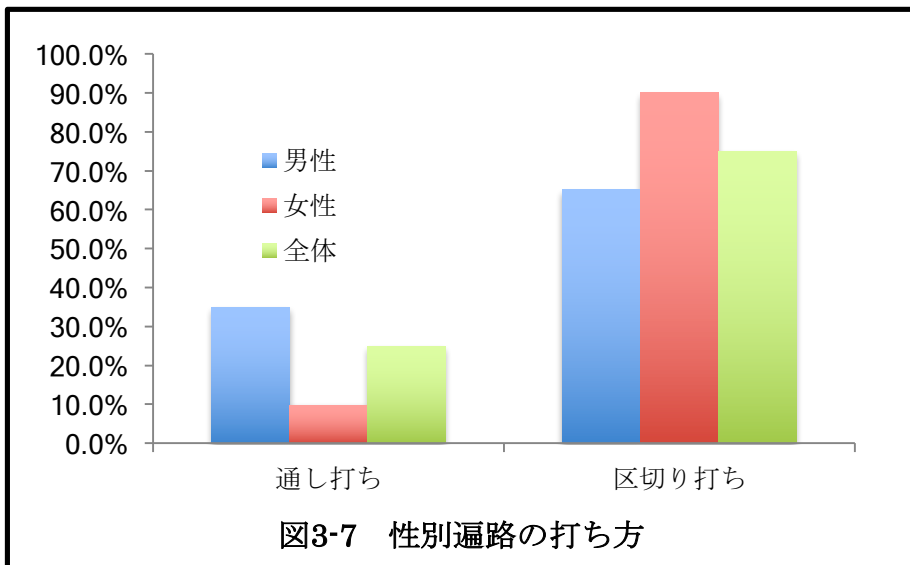
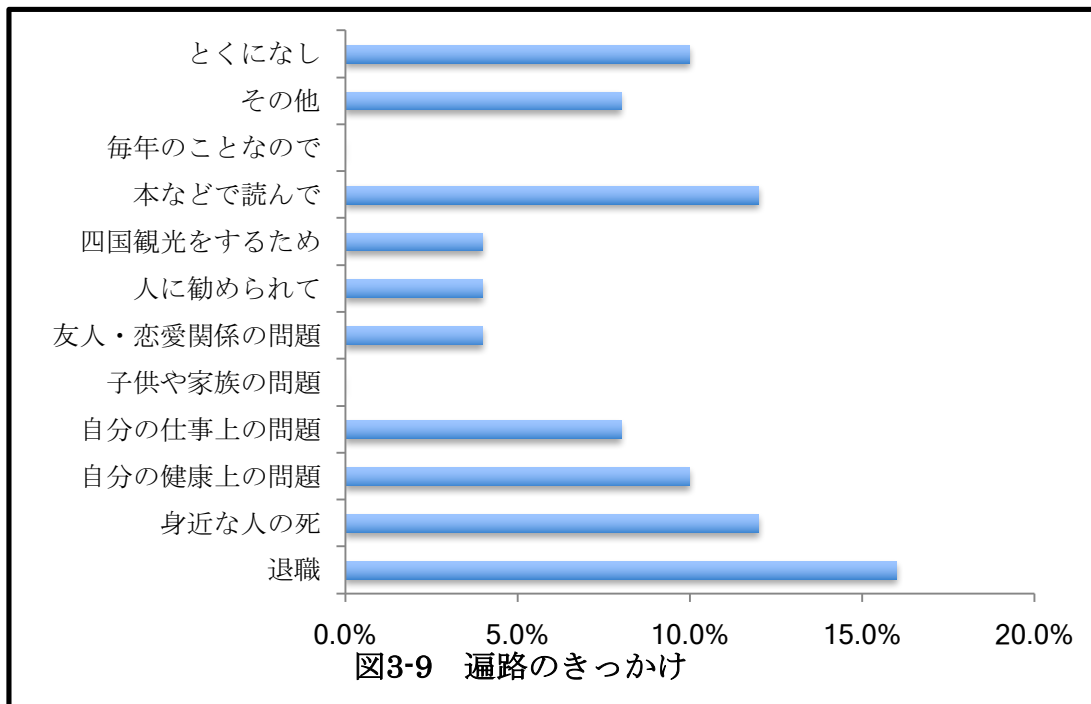


図3-6 車遍路の同行者内訳



2) 遍路のきっかけ

第3章でのアンケート調査と同じく、徒歩で巡礼を行う理由を知るべく遍路のきっかけを調査した。アンケート項目は第3章と同じものであり、「今回の遍路のきっかけになったことは何かありますか」という問いに答えてもらった。その結果、「退職」(16.0%)がトップで、以下「本などで読んで」(12.0%)、「身近な人の死」(12.0%)、「自分の健康上の問題」(10.0%)、「とくになし」(10.0%)、「自分の仕事上の問題」(8.0%)、「その他」(8.0%)といったものが続いている(図3-9)。



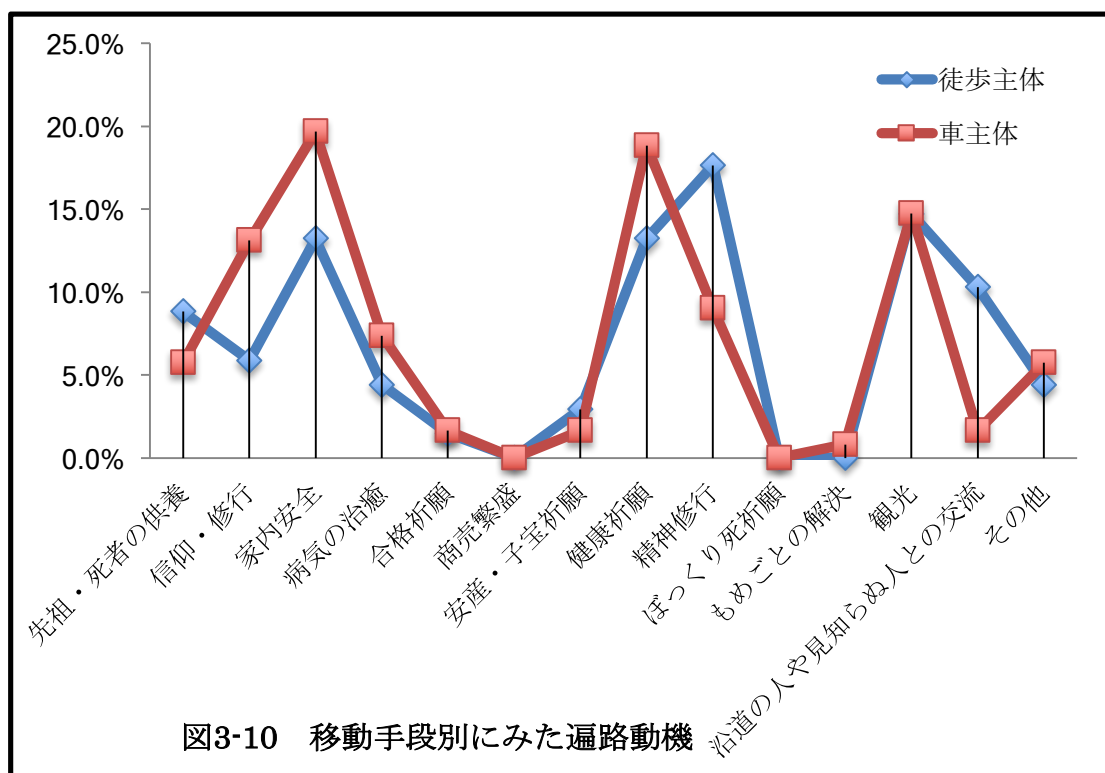
3) 遍路の動機

本調査では、徒歩巡礼者のみを対象としたアンケートのため、札所で行ったアンケートとは違う質問をいくつか行った。そのうちの1つが遍路の動機についてである。遍路の動機については宿の主人の意向で直接的な質問をすることを避けるため、「四国遍路に期待していることはありますか」というようにして間接的に質問をした。この問いに対してのアンケート結果は以下の通りだ。

- ・ 衣食住、普段日常生活で当たり前に行っていることに感謝できること (30 歳、男性)
- ・ 心の安定、人の出会い (27 歳、女性)
- ・ 精神修行とこれからの人生の指針を探すこと (23 歳、男性)
- ・ 歩くことによって無心になり、自分の内面を見つめ直す (68 歳、男性)
- ・ 現状維持 (53 歳、男性)
- ・ 昔と変わらない風景や価値観 (54 歳、女性)
- ・ 自己の成長。これまでの人生の振り返りとこれからの指針探し。人との触れ合いの思い出作り。(29 歳、男性)
- ・ 亡き妻と二人同行をするため (76 歳、男性)
- ・ 退職後の目的意識 (67 歳、男性)
- ・ 人情と自然 (54 歳、女性)
- ・ 健康 (68 歳、女性)
- ・ 体力と共に精神的な面を含め、今現在の自分の状態を知る (68 歳、男性)
- ・ 旅そのものや仏教文化を通して自分自身を振り返ったり、今後の人生を進んでいくためのヒントを得たい。(30 歳、女性)

アンケート結果から、自己の成長や自分探しを動機とした者の存在が見て取れる。しかし、中には「亡き妻と二人同行するため」など死者供養などの宗教的な動機での巡礼者もやはり存在する。

また、札所で実施したアンケート結果から、遍路の動機を徒歩主体の巡礼者と車主体の巡礼者で比較してみると、「先祖・死者の供養」(8.8%)、「精神修行」(17.6%)、「沿道の見知らぬ人との交流」(10.3%)という項目のみ徒歩主体の巡礼者の方が、割合が高いことが見て取れる(図 1-7)。それに対して「信仰・修行」(13.1%)、「家内安全」(19.7%)、「病気の治癒」(7.4%)、「健康祈願」(18.9%)という項目は車主体の巡礼者の割合が高いことが見て取れる(図 3-10)。



4) 四国遍路をしていて感じたこと

この問いでは、徒歩巡礼者がこれまでの経験も含めて、四国遍路を廻っていることで感じたことを答えてもらった。回答数は15 (32 票中) であり、アンケート結果は以下の通りである。

- これまでバイクや車、公共交通機関を使って旅をしてきました、それは時間におわれ観光地を巡り、人との交流は歩き遍路に比べて少なかったと感じています。今回の四国歩き遍路は1日目からいろんな人たちと交流を持つ機会を得ました。こんな出来事は全く予想していなかったことです。(30歳、男性)
- 遍路に出ると心が落ち着く(66歳、男性)
- 四国遍路を含めて使命感をおぼえます。何か自分に世の中にお役に立つことがあれば。(75歳、男性)

- ・ 初日ですがいろんな縁があると思った。まだ1日目なのでこれからいろいろ感じると思います。(27歳、女性)
- ・ 人のあたたかみを感じる事が、日常生活から離れることにより敏感になることができた。(42歳、男性)
- ・ 「寺のたたずまいが良い」と思う寺が多い。若い頃から寺院が好きで廻っているため遍路もその一環なのかもしれないが。(66歳、男性)
- ・ 車で巡った時は案内(標識)があまりないと感じたことがある。いろいろと声をかけていただいたり道順を教えていただいたりして嬉しかった。(48歳、女性)
- ・ 坂が多い。(22歳、男性)
- ・ 感謝の心。当たり前で過ごしている日常が実はとても重要で、一人で生きているのではない、みんなに支えられて生きているのだということ。(54歳、女性)
- ・ 終わってみると楽しく充実した歩き遍路でした。できたら公衆トイレが適当にあると助かるが。霊場のお寺で汚いトイレが少しあった。水洗化を促進願いたい。外国人女性の歩き遍路を見かけるが、もっと歩いていただく為にもきれいな快適なトイレが必要と考える。(68歳、男性)
- ・ 四国の人々の温かさ(23歳、男性)
- ・ 1日だけで多くの人の親切をいただきました。(54歳、女性)
- ・ 88カ所歩き通せると嬉しいです。(68歳、女性)
- ・ 意外に歩き遍路の方が少ない。(68歳、男性)
- ・ 人々が皆親切で温かいこと。豊かな自然が美しいこと。それぞれの寺の建築や庭園が美しいこと。(30歳、女性)

上記の回答をみると、回答者の過半数が道中での人との出会いに対する感謝を述べており、車で廻っていたら出会うことのできなかつた人々と出会うことができたことに喜びを感じている。このことから徒歩巡礼者は札所へ向かう道中での出会いに重きを置いていて巡礼を行っているのではないかと考えられる。

第4節 徒歩巡礼者の宿泊する民宿の存在意義

筆者は、第1章で近年増加傾向にある徒歩巡礼者の中には、信仰心を持った宗教的な意味合いで巡礼を行う者だけでなく、“バックパッカー”のような、自分探しや人との出会いなどの経験を目的として巡礼を行っている者も多いのではないかという仮説をたてた。そこで本章では、“バックパッカー”が宿泊をするであろう安宿(=民宿)として“旅人の宿 道しるべ”にて徒歩巡礼者に対して実施したアンケート調査の結果を述べてきた。第2節、第3節では、“旅人の宿 道しるべ”に宿泊している徒歩巡礼者の人物像や遍路に対する意識などを述べてきたが、本節ではそれらを踏まえて、“旅人の宿 道しるべ”に宿泊する徒歩巡礼者の旅の経験がいかなるものかを明らかにしていく。

まず、調査対象者である“旅人の宿 道しるべ”の宿泊者はどのような動機で徒歩巡礼をおこなっているのかをみていくと、「人の出会い」や「自分の内面を見つめ直す」、「これからの人生の指針を探す」など、自己の成長や自分探しを動機とした巡礼者が多く見られた。宿のオーナーである笠井さんにお話を伺った所、本当に先祖供養をするためだけに廻っている人は宿坊や通夜堂を泊まり歩いているこ

とが多いため、そのような人たちが民宿に泊まりにくることは少ないだろうとのことであった。

また、四国遍路をしていて感じたことを調査対象者に伺ったところ、「人のあたたかみを感じることで、日常生活から離れることにより敏感になることができた」「車などをつかって四国遍路をしたときには感じることでできなかった、人との交流を持つ機会を得た」など、道中での出会いが印象的だと答える巡礼者が多かった。これらの調査結果を受け、高(1998)が、“バックパッカーは、人との出会いを求め、自分が体験してこなかった未知の世界を渡り歩くことで自己実現を満たしていき、新たな出会い・刺激を求め、人とは違う自分だけの価値観を創造しようとするツーリストだ”と述べていたことから、調査地に宿泊をしている徒歩巡礼者も“バックパッカー”的存在であると筆者は考えた。また、大野(2007)は、バックパッキングはいきあたりばつりの旅でなければならず、「予約なし」こそが旅の醍醐味なのだと述べていた。筆者は以前、本調査の調査対象地である“旅人の宿 道しるべ”にて3日間のみ泊まり込みでアルバイトをしたことがあるのだが、その際も徒歩巡礼者がいきなり宿を訪ねてきたり、当日に宿泊できるかどうかという電話がかかってくるが多々あり、このことから“旅人の宿 道しるべ”に宿泊する徒歩巡礼者は全員ではないが“バックパッカー”的存在の者もあり、宿のオーナーの笠井さんは宿での巡礼者同士の交流も多いと述べていることから、この宿はそのような“バックパッカー”的存在の巡礼者たちの憩いの場となっているのではないだろうかと筆者は考える。

第5章 聞き取り調査

第1節 調査対象

筆者は前章で「精神修行」とは具体的にどのようなものなのだろうかと述べたのだが、本研究で使用した早稲田のアンケートの遍路動機の項目に、「自分探し」という項目が存在しておらず、これに該当する一部は「その他」に、一部は「精神修行」などに流れたものと推測される。これについて長田ら(2003)は、“「歩き遍路」はとりわけ「精神修行」動機および個別的な動機が強く、「車遍路」は多様な動機を幅広くその背景にもっていることが指摘できる”と述べており、また浅川(2008)は、“遍路動機で「精神修行」の割合が高いことについて、信仰/観光という2分類が、現代の巡礼者の動機を説明する言葉として、次第に説得力を失いつつあることを示している”と述べている。ではこの「精神修行」を具体的に明らかにするため、筆者は実際に徒歩巡礼者に聞き取り調査を実施した。

本研究の聞き取り調査では、徳島県内の札所を訪れる徒歩巡礼者および民宿“旅人の宿 道しるべ”に宿泊している徒歩巡礼者を調査対象とした。“旅人の宿 道しるべ”は、宿泊客の6割以上が四国遍路を行う巡礼者であり、また宿の主人が実際にお遍路の経験者であるため調査にとっても協力的であったことから、宿泊している巡礼者に聞き取り調査を行う調査対象として協力をして頂いた。調査は、2015年の6月28日、7月20日、10月28日、11月3日、11月6日の計5日間、合計17名に実施した。具体的な調査場所としては、6月28日は1番札所から6番札所、7月20日は23番札所、10月28日は“旅人の宿 道しるべ”、11月3日は16番札所から17番札所、11月6日は14番札所から16番札所である。

表3 聞き取り調査対象者

名前	性別	年齢	出身地	インタビュー日	インタビュー場所
Aさん	男性	70代	千葉県	2015.06.28	1番札所～2番札所
Bさん	男性	40代	東京都(現和歌山在住)	2015.06.28	3番札所～4番札所
Cさん	男性	60代	東京都	2015.06.28	5番札所と6番札所間の休憩所
Dさん	男性	30代	東京都(現徳島在住)	2015.07.20	23番札所
Eさん	男性	20代	東京都	2015.07.20	23番札所
Fさん	男性	20代	東京都	2015.07.20	23番札所
Gさん	男性	50代	兵庫県	2015.07.20	日和佐駅
Hさん	男性	60代	岐阜県	2015.10.28	旅人の宿 道しるべ
Iさん	男性	60代	京都府	2015.10.28	旅人の宿 道しるべ
Jさん	女性	50代	奈良県	2015.10.28	旅人の宿 道しるべ
Kさん	女性	60代	京都府	2015.10.28	旅人の宿 道しるべ
Lさん	男性	30代	愛媛県	2015.11.03	17番札所
Mさん	女性	50代	東京都	2015.11.03	16番札所
Nさん	男性	60代	東京都	2015.11.03	17番札所
Oさん	男性	30代	福岡県	2015.11.06	15番札所
Pさん	男性	60代	東京都	2015.11.06	16番札所
Qさん	男性	50代	オランダ	2015.11.06	府中駅

第2節 調査報告

第1節で述べたように、筆者は聞き取り調査を5日間に渡り、計17名に実施した。この17名の調査対象者については、第1節の表3でまとめている。本節では、この17名の中から数名を取り上げて、具体的な彼らの遍路の動機を分析していく。ただし、1名は四国遍路が本当に徒歩と交通機関のみで廻ることができるのかということに関して調査しにきた国土交通省の人間だったため除くものとする。

事例1：Aさん（70代男性）

筆者O（以下、O）：お遍路はいつからされているんですか？

A：えっとね、始めてやったのが、えーっ今から40年ぐらい前にサラリーマンやってるときに自転車、自転車をちょっとだけ趣味があって、たまたま妹が大阪の堺っていうところにいたんで、そこまで自転車でいって東京まで帰ってくんなら千葉県なんて東海道をね、そしてえーっ徳島へ渡ったらカーフェリーがあるんで、それで帰ろうと思ったらたまたま徳島へおりてみたら、どっかにお遍路の話がでてたんで、でその時に自転車で3回にわけてやったのがはじまりで、えーっ弘法大師がえーっ42歳のときに開いたとか言って、私もたまたまその時に42歳だったもんですから、あのなんか縁がと思ってそれが始めたのが初めてです。

O：毎年お遍路されているんですか？

A：いやいやあの、今回で6回目です。で、歩いたのは前回は初めてで、今回は、えーっ2回目。歩くのはね。

O：なぜ6回もお遍路をされているのですか？

A：いやあのー、よくなんか本にあのーお四国病とかっていうけど、やっぱりそれに近いものがあるんじゃないですかね。やっぱり暇つくって、まあ家内安全、先祖供養？そんなんで、なんとなくなんにも忘れて歩くのが、っていうふうに思いました。印象的なお接待を受けたのが、あのー徳島が前回なんかでも一番よかったね。今回なんか一番のお寺さんにこの荷物を宅急便であの送って受け取ってもらったんですけど、もう最初から大きさどのくらいですかとかね、あの困りますとかそういう話はいっさい無く、しかもお寺さん快く受けていただいたから。

O：いつもは一人でまわられるんですか？

A：そうね。あのー、この去年歩いたときに、一緒に、一緒に歩いた人はだからいません。抜きつ抜かれつをしたり、それから同じあのー善根宿とか、お寺さんのお通夜堂に泊まった人いましたけど、まあお互いにね、勝手に、勝手についていうのはおかしいね、自分のペースで出発して、それをもうもちろん尊重して、一緒にお願いますよとかそういうのはなくてね。ではまあこのへんで。

Aさんはこれまで5度結願しており、今回は6度目の四国遍路である。最初の4度は自転車で巡礼を行っており、徒歩のみで巡礼を行うのは今回は2回目だという。彼には1番札所の霊山寺から2番札所の極楽寺へ向かう道中にて聞き取り調査を行った。Aさんが初めて四国遍路をしようと考えたきっかけは、40年前に興味の自転車で徳島まできてみたところ、お遍路の存在を知りやってみようと思ったとのことだ。現在6度目の四国遍路巡礼を行う動機を伺ってみたところ、「お四国病」のようなも

のであり、家内安全や先祖供養などの思いもあるが、なんとなくすべて忘れて歩きたくなるとのことだった。しかし特に信仰心があるわけではなく、宗教にはあまり興味がないと述べていた。

そもそも「お四国病」というのは、一度結願をするも、もう一度また廻りたいと思ひ四国へと戻ってきてしまうことであり、一種の中毒のようなものであると言えるだろう。ここで例に挙げたAさんのみならず、“旅人の宿 道しるべ”にてアンケート調査に答えて頂いた徒歩巡礼者の中にも、なぜだかわからないが遍路を終えてみるとまた行きたいと思ひもう一度来てしまうという意見があった。「お四国病」というのは現実から離れ、癒しを求める故の行為であり精神を落ち着かせるための行為なのだ。

事例2：Eさん（20代男性）

O：どちらからこられたんですか？

E：東京からです。

O：1番から順番に歩かれているんですか？

E：今回、はい。えっと一、先週の月曜の深夜バスのって、火曜から一国打ちで歩いています。

O：もう徳島県内は通しであるかれて、次また違う県に別のときにいかれてって感じですか？

E：そうですね、今回もう薬王寺でいったん休みとれる間隔として7日かとれて9日なんで、ちょっとね、室戸、高知までいくのは厳しいかなって。はい。

O：ちょっと遠いですね。はい。

E：なんで、まあ薬王寺さんいって、まあ次歩けるとこまで歩いて電車で帰ろうかなって。

O：もう今日帰られる予定ですか？

E：いや、明日か明日の夜の便ぐらいかなって思ってる。

O：なぜお遍路されようと思われたんですか？

E：今回転職しまして、でまあいろいろリセットしようかなって思って、でもともと興味はあったんですけど、で一休みが次の仕事が始まるまで時間があるのと、まあやってみたくって思ってたのでまあじゃあちようどいいかっていうんで、まあ転職がきっかけですね。

Eさんは東京都出身で、今回が初めての四国遍路だ。彼には23番札所の薬王寺近辺にて聞き取り調査を行った。Eさんはまだ20代と若く、もともと四国遍路に興味があったが、会社に勤めていた頃はなかなか時間がとれなかったため、会社を転職したことを機に一度リセットをしようと思ひ、徳島県へと訪れて四国遍路を行ったといういわゆる「自分探し」が動機であると言える。今回の四国遍路は、転職先へ移るまでの間の休みを利用して1週間かけて1国詣りを行っているとのことだった。大野(2011)は、“バックパッキングはアイデンティティの実感実践のために多様な差異(=異文化)を長期間にわたって濃密に経験するための行為だ”と述べていたことから、Eさんの行っている「自分探し」の徒歩巡礼は大野(2011)のいうバックパッキングと同じ分類であると考えられる。

また、Eさんは台風が近づいている日に「遍路ころがし」と言われる12番札所の勝山寺へ向かっており、勝山寺にて納経を終え、山を下る頃には川の水が増してきていたため、死のイメージが頭をよぎったと述べていた。しかしこのような日常では出会うことのない困難を経験することによって、自分の居場所を見直し、人生と正面から向き合うことこそがバックパッキングの醍醐味であると斉藤

(2003)は述べる。そして、Eさんに「遍路をしていて一番つらかったことはなにか」と伺ったところ、「市街地を歩いていた時の周りの人の視線が1番つらかった」と答えていた。市街地を歩いていると見てみぬ振りをされているような感じがしてしまい、郊外へ出ると人が温かくてお遍路をしていてよかったと思えるとのことだ。

事例3：Fさん（20代男性）

O：今日はどちらからこられたんですか？

F：東京です。

O：今回はじめてお遍路されるんですか？

F：区切りでやってるんで今年、去年一回きて、まわるのは一回目なんですけど、お遍路自体は2回目。

O：それは1番からまわられてるんですか？

F：前回1番から11番。んで、今回続きから、今回ここでおしまい。

O：今日は22番から歩いてこられたんですか？

F：はい。平等寺のお隣の山茶花さんから。

O：なぜ歩いてお遍路されようと思ったんですか？

F：もともと、なんかお遍路自体にはそんなに興味がなくて、徳島に来たことがなかったんで、なんか徳島きてみよーって思って、で徳島なにあるのかなとちょっとガイドとかで調べたら、お遍路さんとかもあって、去年がたまたま1200周年とかで、盛り上がってる年っていうんでなんか観光のいっかんで行ってみようかなっていうので。

O：今日で県内終わられて、今度またつづけていかれる予定ですか？

F：そうですね。仕事やってるんでまた連休とかに絡めて、何年かかるかわからないけど、とりあえず一周はしようかと。

Fさんは東京都出身で、遍路をはじめたのは1年前だが、その際1番札所から11番札所までを廻り、今回四国に訪れるのは2度目で、前回の続きである12番から23番まで歩いて廻られていた。もともと四国遍路に興味があったわけではなく、徳島県を訪れたことがなかったため徳島県を訪れてみよーと思いついた際に、四国遍路の存在を知りやってみようと思ったそう。Fさんはお遍路自体にはあまり興味がなく、徳島にくるついでのようなものであったため、いわゆる「にわか遍路」と呼ばれるものだろうと考えられたが、1度きて少し歩いて辞めるのではなく、またもう1度続きを歩くために徳島を訪れ、今後も結願するまでは続けるとのことだったので、お遍路をやってみたら意外とはまっってしまったというような「お四国病」に似たものなのかもしれないと筆者は考えた。

事例4：Hさん（60代男性）

O：どちらからこられたんですか？

H：私はあの一岐阜の多治見という。

O：今回は歩いて、どこまでいかれる予定ですか？

H:今回は徳島。

O:あ、徳島だけ。もう1番から23番まで順番にということですか？

H:23番まではちょっと行けないですね

O:遠いですよね

H:みたら22から23までむっちゃ遠いですよね

O:そうですね。ほんとに半日ぐらいでいかないといけないですね

H:だからちょっと23番はあきらめて、22までということで切り上げようかなと、今回はですね。

O:なんで1人で歩かれようと思ったんですか？

H:だから最初のあれと一緒にですよ。最初にあれしたように、うちの家内があの一八幡浜なんですよ、愛媛の。でそれでちょこちょこちょこあの一四国っていうのはきてましてね、で四国っていうのはその一八十八カ所があるって知ってましたんで、一回やってみたくてなんとなく思ってたんですよずっと。なんとなくね。それであのたまたまあの一、現役のときはねなかなかできる機会がないですから、それでまあ退職しているいろんなものをだいたいすべてね、68ですもんで。あの、できる環境にまあなっただっていうのとね、やってみようかっていうのが一致したんです。それで、なおかつ今のうちにやっとなないと、体力的にっていうのもあって、じゃああとはもう行くしかないって。そんな感じですよ。だからちょうど良かったんじゃないですかね。あの一その八十八っていうその、あるなんていうんですか、枠っていうんですか大きく言う

O:もう決められてるー

H:そうそうそう。で、それも歩きからさまざま全部バリエーションあるじゃないですか

O:そうですね、車で行かれる方とかも結構多いですし

H:で私はたまたまあの一その体力的な面で自分で確認したいっていうのもありますし、自分で歩いていってみようかなって。

Hさんは岐阜県出身で今回が初めての四国遍路である。彼には旅人の宿 道しるべにて聞き取り調査を行った。彼は“妻が四国出身のため四国遍路の存在は知っており、1度は廻ってみたいと興味は持ちつつも会社勤めしている頃は時間がなくて廻ることができなかつたため、定年退職して時間に余裕ができたことで歩いてみようと思った”と述べており、また“高齢のため自分がどこまで歩けるのかはわからないが、歩けるところまで自分の体力の限界に挑戦してみたい”とも述べていた。Hさんはロードバイクに乗ることが趣味であり、ロードバイクで四国88カ所を廻りたいと考えていたため、今回はその下見をかねて徒歩で巡礼を行っていた。またHさんは、68歳という年齢で自分がどこまで歩くことができるのか、自分の体力と精神的な限界を知りたいと思い四国88カ所を廻ろうと思いついたとのことであった。大野(2011)は、“バックパッカーはアイデンティティの刷新を願って旅を実践したにもかかわらず、旅の帰結において、彼らは変わったというよりも、むしろ既存のアイデンティティを再確認・最強化させたというアイロニカルな状況が生じているように思われる”と述べており、これは新たな自分を発見するだけでなく、自らを再確認するためにバックパッキングをする者も存在するということだ。つまり「興味本位」で自分の限界に挑戦することを目的とし徒歩巡礼を行うことは大野(2011)のいうバックパッキングをすることと同じであると考えられる。

事例5：Jさん（50代女性）、Kさん（60代女性）

O:今日どちらからこられたんですか？

K:私は京都です。

J:私は奈良

O:お二人で一緒に、ちょっと行ってみようみたいな感じでこられたんですか？

J:もともとはね、あの世界一周クルーズがあって、それで知り合ったの

K:3ヶ月半のって、そこでちょっと知り合って、で帰ってきてから何回かしか会ってないね。

J:うん、まだ5回、4回ぐらい

O:あ、そうなんですか

J:そう、最初に鞍馬寺いたり、京都市の水族館いたり、

K:京都と奈良はね、近いからって。ここは、急に決まったね

J:うん。最初四国はねもともとちょっとしんどいときに、1人でぶらっとまわりたくなって思ってた、いろいろこうね資料は集めてただけど、でももうなあって、すっきりして、もうね、そのままにしようと思ってたのを、たまたま話にしたら、こんな感じになって。だからこう、なんかがんばろうっていうよりはなんかどっかかっていうと

O:ちょっとやってみようかなって感じで？

J:そうそうそう

K:軽い気持ちで、おいしいものを食べて、ちょっと観光もいれて

J:ただちょっとこだわりがあって、できるだけ歩きたいなって思って、

K:歩くのだけは歩こうって

J:今日ね、でだしバスできて、おりて、もうしょっぱなからね、間違った方歩いていたら、たまたま、あの一お年の、年配の方が、そっち違うよって教えてくれはって、だから間違えていきそうになって、それを近くの人がたまたまおばさんがいてはって、こっちちゃうよ一って教えてくれはったり、なんか今日だけ、1日だけでなんか何人もの人にお世話になって。で傘もね、ぐらぐらしてたのをぐっと結べるようにしてくれたのと、あと柿をね、一つ頂いて、なんか今日だけでねいっぱい、なんかそういうのは奈良にはないな。奈良で歩いてて、柿いらんとかないし。

O:そうですね、逆になんかこられてもちょっと不安というか、そういうのもありますし

J:そうそうそう。そういうのはないね。奈良もいとこやけどね。京都はもっと人が多いね。

K:うーん、だから人がいないところがね。うん。気持ちが落ち着くっていうか。

Jさんは奈良県出身、Kさんは京都府出身であり、仕事の休みに合わせて月に1度、2泊3日で区切り打ちを行っている。彼女たちには、“旅人の宿 道しるべ”にて聞き取り調査を行った。Jさん・Kさんは今回が初めての四国遍路で、彼女たちは昔からの友人というわけではなかったが、船で世界一周旅行を行った際に船内で出会い意気投合し、日本に帰ってきてからも何度か一緒に旅行へ行くうちに、二人で四国遍路へ行こうという話になり今回訪れたそう。今回は2泊3日で廻れるところまで廻ろうと考えており、彼女たちは札所を巡ることはもちろんだが、それよりもその道中の出会いや観光に重きを置いていると言える。今後も月に1度2泊3日で四国を訪れ、四国遍路を廻っていく予定だそう。Jさんが初めて四国遍路をしたいと考えたのは、子育てで疲れてしまい心に余裕がなくなったときだそうだが、自分に限らず都会に住んでいる人や働いている人は生きていくのに必死で心

に余裕がなくなっているため、四国に訪れてお接待などで人と触れ合うことを求めていると述べていた。また、団体のツアーなどではなく二人で歩く理由については、時間に縛られず自分たちのペースでのんびりまわることができるからだと述べていた。

事例6：Mさん（50代女性）

O:今日はどちらからこられたんですか？

M:千葉です。

O:もしよろしければどうしてお遍路しようと思われたのか...

M:えー、でもあたし最初の動機は歩きたかった。ただ歩きたいなって思って。太ってるから運動不足もあって歩きたいっていうのからはじまって、ですね

O:お遍路されてて、お遍路してみてここがよかったとかかそういうところあったりしますか？

M:ここがよかった...うーん...

O:なんか、前と変わったとかか

M:ほんとわたし興味本位ではじめたんでそんなに...でもちょっと亡くなった母のことは...思い出す...すみません

O:いえいえ、大丈夫ですか？

M:ちょっとね、こう、こういう話するとだめなんですよ...ふと思い出すんですよね。まあ、去年亡くなって、それもあってやろうかなーなんて、あと歩きたかったし。まあこれやったからどうってこと、母のこととかはないんですけど、なんとなく、家にいても毎日お墓はいくんですけど、なんだろうね、なかなか踏ん切れない。まだまだ思い出しちゃう。

M:なんか思い出しちゃうとだめですよ。本当のことはそこですね。そうなの、家にいてもそうだけど、いまだになんかね、なんだろうなあ、なかなか踏ん切れない。忘れられない。ほんとになんかね、親の話するとだめなんです。ほんとに。私ねお経、般若心経とかなかなか読めないんですよ、わからないしできないから、何も無いんですけど、ただきて、お願いするだけです。ね。そうなの。ちゃんとしたお経がよめないから、やってる人すごいなと思って。私そういうのができないから。だから、ほんと、いいとこいってってそれだけ、お願いしてる。すみません。ほんとに私だめなの。ほんとに母の話すると、すぐに涙がでちゃうんです。いい歳してほんとに。なんかね、みてるだけでね、だめなんですよ...いつになったらほかにしゃべれるのかなって。

Mさんは東京都出身で区切り打ちを行っており、今回で四国に訪れるのは3度目である。彼女には16番札所の観音寺にて聞き取り調査を行った。Mさんが巡礼を行う動機は、もともと歩きたかったということだったが、その心の内には母親が亡くなった供養という動機も隠されており、母親のことを思いながら徒歩で巡礼を行うことで、少しでも供養になればとのことだった。Mさんのように、もともとの動機は供養であっても、その動機は心に秘めており、供養以外にも動機を携えて巡礼を行っている人は多いのかもしれない。

第3節 徒歩巡礼者の歩く経験

筆者は第1節で、本研究で使用した早稲田のアンケートの遍路動機の項目に、「自分探し」という項目が存在しておらず、これに該当する一部は「その他」に、一部は「精神修行」などに流れたものと推測した。そして2節では聞き取り調査を実施した17名の調査対象者の中から6つの事例を取り上げたのだが、では彼らが歩くことで感じたことはなんなのだろうか。

事例2のEさんを見てみると、彼は台風が近づいている日に「遍路ころがし」と言われる12番札所の勝山寺へ向かっており、勝山寺にて納経を終え、山を下る頃には川の水位が増してきていたため、死のイメージが頭をよぎったと述べていた。このような経験は普段日常生活を送っているときにはほぼ体験することはないことであり、非日常の空間であるからこそその経験だと言える。そして、事例5のJさんとKさんを見てみると、彼女たちは歩いている道中にお接待で食べ物を受けとったり、道案内をしてもらったと述べており、お接待などは四国遍路だからこそ起こりうる経験であり、都会で生活をしているとまず経験はしないだろう。そして車ではなく歩いているからこそその経験でもあると言える。しかし、道中はお接待を受けるなどの良いことばかりではなく、歩いているからこそつらい経験もあり、山道や田舎の田んぼ道を歩いているときは近所の方が優しく見守ってくださり、お接待を受けることもしばしばあるのだが、都市部を歩いているとやはり好奇の目にさらされることもあるため、徒歩巡礼者が一番つらいと感じるのは都市部を歩くことだそう。

ここまで徒歩巡礼者の動機や歩いたことによる経験について述べてきたが、彼らの動機を調査してきて筆者が気づいたことは、彼らはみな歩くことによって、自己を見つめ直し、また普段は出会うことのない人たちとの出会いを求めているということだ。このような非日常的な経験や出会いは、歩いて行う旅だからこそ得られる経験であると言えるだろう。

第6章 まとめと考察

第3章では、6番札所安楽寺、17番札所井戸寺、23番札所薬王寺にて行った全巡礼者を対象としたアンケート調査の結果と、その基となった1996年の早稲田大学道空間研究会の実施したアンケート調査の結果を比較することで、時代による巡礼者の人物像、また巡礼者の四国遍路に対する意識の変化を見てきた。遍路に対する意識の変化として、遍路の動機をみると、20年前は「先祖供養」などの宗教的な意味合いをもった動機の割合が高かったのに比べ、現在は「先祖供養」の割合は低くなり、「観光」や「精神修行」などの割合が高くなっていることが見て取れた。

また、徒歩遍路に対する意識を比較してみると、20年前の調査結果と比べて本調査の結果は徒歩遍路にこそ遍路の意味があると考える人の割合はあまり変化がみられなかったが、同行者の人数を比較してみると、歩き遍路・車遍路ともに1人での巡礼者の割合が20年前よりも増加していることがみてとれ、このことから旅の個人化が進んでいるのではないかと提言した。そして徒歩遍路に対する意識の調査として、遍路は徒歩による道中修行にこそ意味があると考えるかどうかを質問してみたところ、徒歩遍路にこそ意味があるとは考えない人の割合が20年前に比べて本調査の方が低くなっていたため、歩いて巡礼を行うことに意味を見いだしている人が増加したことが言えた。

第4章では、“旅人の宿 道しるべ”にて行った徒歩巡礼者を対象としたアンケート調査の結果と、第3章で述べた全巡礼者を対象としたアンケート調査の結果を比較した。徒歩巡礼者と車での巡礼者の同行者の人数を比較してみると、徒歩巡礼者は1人での割合が74%と圧倒的に高く、それに対して車での巡礼者は1人で巡礼している者は24%と約3分の1であることがわかった。第3章で20年前の徒歩巡礼者の同行者の内訳と本調査での徒歩巡礼者の同行者の内訳を比較した際、1人で巡礼を行っている者の割合が高くなっていることがわかったため、車での遍路と比較しても1人で遍路をする割合は徒歩巡礼者の方が高いことから、歩いて1人で旅を行う者が増加してきていると言えるのではないだろうか。筆者は考えた。そこで、移動手段別に遍路の動機をみると、徒歩で巡礼を行っている人は「精神修行」と「沿道の人や見知らぬ人との交流」を動機としている割合が車で巡礼を行っている人に比べて高いことがわかる。

第5章では、徳島県内の札所を訪れる徒歩巡礼者および民宿“旅人の宿 道しるべ”に宿泊している徒歩巡礼者を調査対象として聞き取り調査を実施した。

本研究では、聖地巡礼の1つとして四国八十八カ所を巡る巡礼者を事例とし、徳島県における徒歩巡礼者に焦点をあて、車社会の現代にあえて歩いて四国八十八ヶ所を廻る人びとがなぜ歩くのかを検討した。その上で、筆者は近年増加傾向にある徒歩巡礼者の中には、信仰心を持った宗教的な意味合いで巡礼を行う者だけでなく、“バックパッカー”のような、自分探しや人との出会いなどの経験を目的として巡礼を行っている者も多いのではないかという仮説をたてた。そこで、「歩く」という移動手段をあえてとることによる旅の経験に注目し、彼らが車ではなくわざわざ歩いて巡礼を行う動機について検討することを通じて、現代社会におけるツーリズムのあり方について考察していくことが本研究の目的であった。

筆者は仮説を検証するため、現在の巡礼者の人物像等を把握し、その上で徒歩巡礼者の意識調査として聞き取り調査とアンケート調査を実施した。アンケート調査の結果より、現在の巡礼者は、四国近辺よりも関東などの遠方から訪れる巡礼者が多く、20年前と比較して徒歩巡礼者の割合が高くなり、

さらに徒歩巡礼者の中でも女性の割合が高くなっていることがわかった。徒歩巡礼者の割合は、確実な数値は不明だが一般的に全体の1割程度と言われることが多い中、本調査では2割以上の巡礼者が徒歩で巡礼を行っており、徒歩と車の併用の巡礼者もあわせると3割以上の巡礼者が徒歩での巡礼を行っていた。また、20年前の調査と比較しても、20年前は1割程度しか徒歩巡礼者が存在しなかったため、徒歩巡礼者の割合が増加していることは一目瞭然だ。ではどのような動機の徒歩巡礼者が多いのかというと、「観光」や「精神修行」といった自分探しや道中の人との出会いを目的とした徒歩巡礼者だ。ノイ(2004)は、語りの分析から現代のバックパッキングは旅人同士のコミュニケーションで成立している相互依存的な旅であることを明らかにしたが、道中の出会いを目的とする徒歩巡礼者の動機は、バックパッカーの定義[高 1998]にあった「他の旅行者との出会いを強く求める」ことに等しく、また徒歩巡礼者は1人で歩いている場合が多いことから「独自で柔軟な旅行計画を立て[高 1998]」ながら歩いていると言えるため、このような徒歩巡礼者は“バックパッカー”と同じような存在であると考えられる。

最後に、本研究では徒歩巡礼者を対象として彼らがなぜ歩くのかを検討することを通じて、現代の旅の形というものをみてきたが、そこには他者との出会いや触れ合いを求めているというバックパッキング的な要素がみられた。そしてこのような“バックパッキング”的な巡礼を行う者たちは、みな個人もしくは少人数で歩いている場合が多いことが多く、それはまた20年前と比べても増加していることがわかった。このことから現代の旅は、個人化してきているのだと言える。旅の歴史は個人での旅から始まり、大衆旅行を経て再び個人での旅へと戻るのが、個人に戻ったとはいいつつも昔とは違い、巡礼の旅から“バックパッキング”をすることでの新たな自分や他人との出会いの旅へと変化していったのだ。

参考文献

- 浅川泰宏 2008、『巡礼の文化人類学的研究-四国遍路の接待文化-』、古今書院。
- 浅川泰宏・星野英紀、2011、『四国遍路-さまざまな祈りの世界-』、吉川弘文館。
- Boorstin, Daniel, Joseph, 1962, *The Image: A Guide to Pseudo-events in America*. (=1964、星野郁美ほか訳『幻影の時代-マスコミが製造する事実』東京創元社。)
- ダニエル・J・ブーアスティン 1991 『幻影の時代-マスコミが製造する事実-』第30版 東京創元社
- 土井清美、2012、「サンティアゴ・デ・コンポステーラ-変容する巡礼空間-」、星野英紀・山中弘・岡本亮輔 編、『聖地巡礼ツーリズム』、弘文堂、20-25。
- 橋本和也、1999、『観光人類学の戦略-文化の売り方・売られ方-』、世界思想社。
- 星野英紀、2001、『四国遍路の宗教学的的研究-その構造と近現代の展開-』、法蔵館。
- James, Clifford, 1997, *Routes: Travel and translation in the late twentieth century* Harvard University Press. (=2002 毛利嘉孝ほか訳 『ルーツ-20世紀後期の旅と翻訳-』月曜社。)
- 門田岳久、2013、『巡礼ツーリズムの民族誌-消費される宗教経験-』、森和社。
- 高容生、1998、「バックパッカーの観光学-オーストラリアにおける分析-」(<http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/1998/00495/contents/005.htm>,2005.11.12.)。
- 森正人、2002、「戦後から1980年代までにみる四国88か所巡礼の動態-マス・メディア、観光とのかかわりから-」『人文論究 51(4)』160-173。
- 森正人、2005、『四国遍路の近現代-「モダン遍路」から「癒しの旅」まで-』、創元社。
- Noy, Chaim, 2004 THIS TRIP REALLY CHANGE ME Backpackers' Narratives of Self-Change. *Annals of Tourism Research*, 31(1):78-102.
- 大野哲也、2007、「商品化される「冒険」-アジアにおける日本人バックパッカーの「自分探し」の旅という経験-」『社会学評論 58(3)』268-275。
- 大野哲也、2011、「アイデンティティの再肯定-アジアを旅する日本人バックパッカーの「自分探し」の帰結」『関西学院大学社会学部紀要(111)』、155-170。
- 大橋昭一、2012、「ツーリズムの定義と概念に関する一考察-ツーリズム概念の革新を目指す一つの試み-」『観光学 8』13-22。
- 岡本亮輔、2009、「聖地の零度-フランス・テゼ共同体の事例を中心に-」『宗教と社会 15』3-22。
- 岡本亮輔・川崎のぞみ、2012、「5-1 明治神宮・清正井-パワースポットのつくられ方」、星野英紀・山中弘・岡本亮輔 編 『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂、142-145。
- 岡本亮輔、2012、「第5章 信仰なき巡礼者-サンティアゴ・デ・コンポステーラへの道-」山中弘 編 『宗教とツーリズム-聖なるものの変容と持続-』世界思想社、126-148。
- 長田功一・坂田正顕・関三雄、2003、『現代の四国遍路-道の社会学の視点から-』学文社。
- 斉藤聖二、2003、「バックパッカーになる」青柳まちこ編『文化交流学を拓く』世界思想社、26-43。
- 佐藤久光、2004、『遍路と巡礼の社会学』人文書院。
- Tomasi, Luigi 2002 "Homo Viator: From Pilgrimage to Religious Tourism via the Journey." In Swatos, W.H.Jr. and L. Tomasi (eds.), *From Medieval Pilgrimage to Religious Tourism: The Social and Cultural Economics of Piety*. Praeger, 1-24.
- Urry, Jhon, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. (=2014 加太宏邦訳『観光のまなざし[増補改訂版]』法政大学出版局。)

早稲田大学道空間研究会、1997、『四国遍路と遍路道に関する意識調査』。

山中弘、2012a、「概説 作られる聖地・蘇る聖地-現代聖地の理解を目指して」星野英紀・山中弘・岡本亮輔 編『聖地巡礼ツーリズム』弘文館、1-11。

山中弘、2012b、『宗教とツーリズム-聖なるものの変容と持続-』世界思想社。

参考 URL

徳島県観光政策課 2011 「徳島県観光動向調査」『平成 23 年版 徳島県観光調査報告書』

(<http://www.pref.tokushima.jp/docs/2011102600126/files/23doukou.pdf>,2016/01/28)

四国八十八ヶ所霊場会公式ホームページ (<http://www.88shikokuhenro.jp/map.html>,2016/01/28)